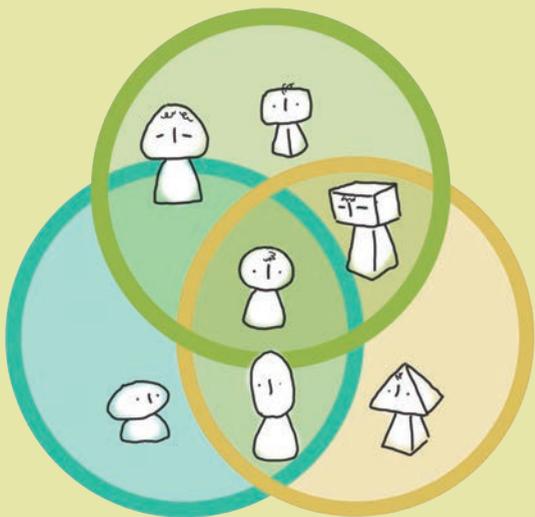


つないでほどく アイヌ／和人



aynu
teetawanoankur
kanpinuye cise
kapar kanpisos
12

北原モコットウナシ

もくじ

はじめに

1

第1章 アイヌ／和人の誕生

・先住民族

9

「純粋民族症候群」ー 民族は「不変」でも「純血」でもない

12

体質（人種）による「境界」

17

【コラム①】「白人」かどうか、誰が決める？

18

・文化による「境界」

20

・マジヨリティとマイノリティーの関係

25

・「どっちもどっち」は成り立たない

26

【コラム②】「アイヌ民族を理解するために」

32

・社会モデルー「マジヨリティファースト」な社会

33

【コラム③】アイヌに会ったことがない？ーカミングアウトとゾーニング

37

【コラム④】アイヌ／和人の人口は？

43

・「和人と言われたくない」

44

・和人の優位性

47

・善悪の問題ではない

51

【コラム⑤】ジェンダーギャップ

53

・差別

54

・差別を見えなくするもの

58

・逆差別（マジヨリティ差別）

64

第2章 誰がアイヌ／和人なのか

・アイヌか和人か、誰が決めるの？

【コラム⑥】どうやって日本国民になるの？

・どこでアイヌ／和人だと感じるの？

1 体質のこと

2 文化のこと

3 血筋のこと

アイデンティティは重なる・変化する

【コラム⑦】「混血」「ハーフ」「ミックスルーツ」

・被差別リスク・押戻しリスク

・家族・地域のつながり

・DNAでアイヌか和人かわかる？

・アイヌになれる？

・縄文までさかのぼれば同じ？

第3章 あなたをしばるポニタク(呪いの言葉)

「あなたは本当のアイヌではない」

「今はもう差別はなくなつた」

「あの人は良い人だから差別をしない」

「自分は差別をしない／この組織に差別はない」

77

77

79

80

81

86

89

92

95

97

102

104

106

109

113

114

115

118

119

「自分は本州出身だ」……………120

「昔の人間がしたことへの責任を取らされるのか」……………122

「私にはアイヌの友人がいる」……………123

「自分もアイヌなら良かった」……………123

「アイヌがこれでいいと言っている」……………126

「違いを強調するから差別が起きる」……………127

「差別をされる方にも原因がある」……………128

「寝た子を起こすな」……………129

「アイヌだけでなくみんなに配慮が必要だろう」……………130

第4章 さまざまな人の経験を知る ― 対談集……………132

1 A氏 アイヌルーツ……………132

2 B氏 アイヌルーツ(?)……………142

3 C氏 和人ルーツ……………148

4 堺由香氏 アイヌルーツ……………152

ブックガイド……………189

おわりに ― つないでほぐく アイヌ／和人……………191

つないでほごく アイヌ／和人

北原モコットウナシ

はじめに

センターブックレット12 『つないでほどく アイヌ／和人』を刊行します。アイヌ／和人とは誰か。あなたはその中に入るのか入らないのか。ここの間かれたとしたら、思わず考え込んでしまう人もいることでしょう。「そのどちらかしかないのか」と感じることもあるかも知れません。本書の1つの目的は、これを考えるヒントとなることです。

アイヌ民族のくらしも多様化しています。性別、職業、年代、性的指向、あるいはアイヌ・和人以外のルーツ（例えば他のアジア地域、アフリカ、ヨーロッパ）の組み合わせを変えていくと、アイヌ民族の中にも四〇九六通りの立場がありえます（表1）。じつさいには住んでいる場所もちがいますし、ルーツや職業などはもっと多様です。から、からに多くの立場があることになります。また、今日では「自分の生き方



表1. 6つの枠でとらえる多様性 キム（2021）をもとに作成

は自分で選ぶ」という考え方が一般的です。そのとき生き方の土台となるのが、どのような時代、場所、人の間に生まれたかといったことです。人を木に例えると、生まれることは根をはって芽を出すこと、生まれた環境は土壌のようなものです。成長しながら転居したり、他の人と関係を作ったりと、生まれたあとの生活は自分で選ぶことができたとしても、どのような土地にどのような根を張ることになる（なった）かは、あらかじめ決まっています。その人がアイヌ／和人のいずれか、あるいはまた別の立場なのかということは、

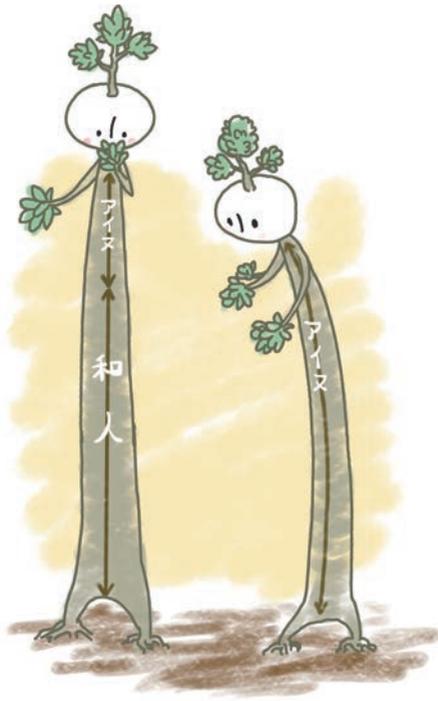
こうした「根っこ」の体験」によって形づくられます。ただ、木の場合にも、例えば丸い葉のヤナギと長い葉のヤナギが受粉をして種をつけることがあります。アイヌにも和人にも、または別な集団にも先祖がいるとすれば、その中の一つを「自分らしさ」として選ぶこともあり、どれも自分だと感じることもあります。その人の根が変わるわけではなくとも、感じ方はその人の自由です。

また、養子や親の婚姻などの形で、生まれた時とは別の人間関係の中に入ることもあります。

早い時期にそうした変化が起きれば、その人の根や芽は、その環境に合わせて育つでしょう。さまざまな事情により成長してから自分の根のことを知る・意識することも、よくあります。変化



した環境、あとから知った自分の根を「自分らしさ」とする自由もある、とアイヌは考えてきました（P90 参照）。そうすると、誰でもアイヌ／和人になれるのか、という疑問もわくかも知れません。もちろん、そんなに大雑把ではありません（P106 参照）。



「自分が何者かなど気にしたことがないし、関心もない」

こういう感想もわくかも知れません。ある人にとって何でもないことが、ある人にとっては重大で、しかもすんなり説明できないことがあります。その大きな理由は、社会に存在する自民族中心の考え方や差別にあります。本書のもう一つの目的は、民族集団どうし、あるいは民族の中で、他の人への共感を作り出すことです。アイヌの中にも多くの立場があり、自分と全く同じ立場の人はそうそう見当たらないかもしれません。違いを無くすのではなく、違いを大切にしながら共感しあえることが求められます。

共感とは、十分に時間をかけ敬意をもって人と触れ合うことで生まれます。本書が参考にした心理学の研究では「共感ができる」と思うだけで、共感力が育つと言います。時間をとることも触れ合う場を作ることも簡単ではないかも知れませんが、他

の人の考えや体験を読むことでもいくらかの効果があるでしょう。

2つの目的に向け、1章では日本社会と格差・差別のしくみ・歴史について、2章では私たちが民族性（民族的立場）を考えるとときのパターンを解説します。民族性や差別について実際の体験や悩みに関することを知りたい、という人は3章から読んでください。アイヌやマイノリティについてよく耳にする言葉と、それをどう考えるか、ポイントをまとめてあります。4章は、アイヌ・和人の立場でくらす人の体験を語った対談集です。最後に、各テーマをもっと深く考えたい人に向けてブックガイドを用意しました。本書が、自分や他者を知り、考えるヒントになることを願っています。

第1章 アイヌ／和人の誕生

―「民族」のなりたちは新しくてあやふや。しかし、今の社会では大きな意味を持っている、その理由を見ていきます。―

日本列島のうち、樺太、千島、北海道から本州東北北部に住んできた人びとはアイヌ、本州、四国、九州に住んできた人びとは和人とよばれます。九州より南には、あまみんちゅ（奄美の人）やうちなんちゅ（琉球の人）がくらし、小笠原諸島にはハワイから移住した先住民やヨーロッパ系の人々がくらししてきました。

明治時代になると、和人は新しい国家を作り、周囲の人々を国民に編入しました。このことによつて、それまで別の集団としてくらしていた人々が、1つの国のマジヨリテイとマイノリテイの関係になりました。そして「アイヌ／和人とは何か」が、だんだんはつきり決められていきました。現代の私たちが「自分はアイヌなのか和

人なのか」と戸惑うのは、このとき作られたイメージが単純で、現実にある多様性と合わないためです。

「和人(わじん)」という言葉を初めて見る方もいるかもしれませんが、「日本人」の方が使われているのに、あえてこの言葉を用いるには理由があります。『広辞苑』によると「日本人」という言葉には、ルーツに関わりなく「日本国籍を持つ人」と、「モンゴロイドであり日本語を使う」集団との2つの意味が含まれます。日本国籍は様々な地域にルーツを持つ人が取得できますが、「昔から日本に住んできた」人々と、最近日本国籍になったばかりの人では言葉や文化、意識が大きくちがいます。そこで、国籍は同じでも言葉や文化、ルーツについて話すときは、多数派の人々を和人と呼んで、他の人々と呼び分けるのです。なお「和人」は、江戸時代に和人自身によって使われ始めた言葉です。戦前には「内地人」や「一等国民」とも呼ばれました。

アイヌや和人は「民族」だとされます。民族というと、現代日本語の語感では「特殊な服装や習慣を持つ人々、前近代的な価値観・しきたりに縛られた人々」が連想されることもあるようです。ですから、和人（日本人）のような「ふつう」の人びとも一つの民族だと聞くと違和感があるかもしれませんが、気にしないことにしましょう。アイヌ史や和人史を考えるとときには、日本列島にヒトが住み始めたところから話が始まることもよくあります。ですから「民族」は、はるか昔から存在してきたように感じます。しかし、歴史を見ると必ずしもそうではないのです。

先住民族

先住民族は、英語の indigenous people(s) を和訳した言葉。先住民族とは、ある「状態」を表しています。それは、他の場所で成立した近代国家（A 民族）が、領

土を拡張してきて、同意をしないうちにもともとB民族が住んでいた地域を取りこ

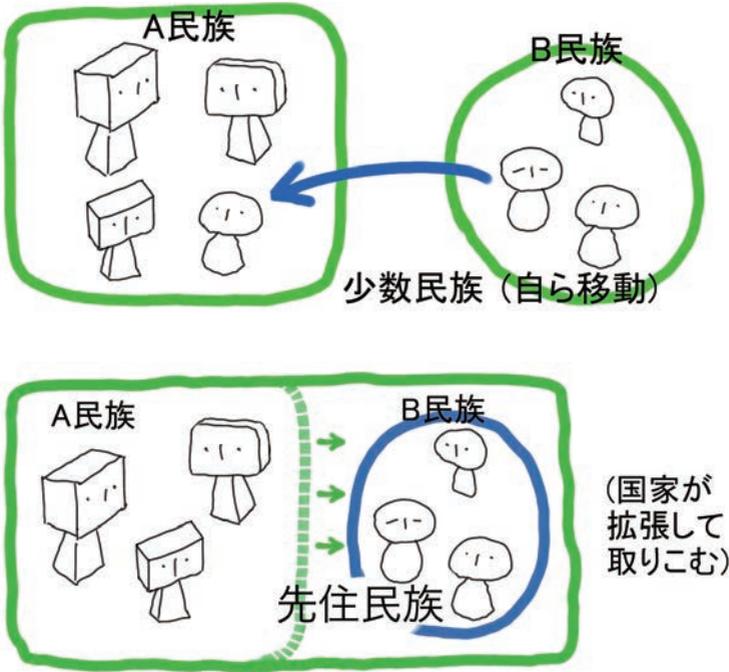


イラスト1. 少数民族と先住民族

(参考 落合研「令和3年度 アイヌ・先住民研究センター公開講座
アイヌ施策推進法のもとでの地域の取組と課題— 平取と阿寒の事例か
ら—」配布資料を元に作成

んでしまった状態です。この点で、自分から他の国に行く移民や少数民族とは異なります。同意をせずに国家に取りこまれていくことからわかるように、自由な意思や主権(自分たちのことを自分たちで決める力)は守られていないことが多いのです。取りこみの過程で、国家の主流派に言葉・ものの考え方・生活スタイル(仕事の仕方や選び方、教育の仕方など)など色々な面で歩み寄りを強いられます。そうした生活できない仕組みになっているのです。なお「先に住む」という字が使われたために「その土地にいちばん初めに住んだ人」と誤解されることがあります。例えば「日本人(和人)は本州の先住民だ」という意見がありますが、和人は自分達を主体とした国家を作り、他を従属的な地位に置いているので、先住民的な状態にはありません。

「純粋民族症候群」――民族は「不変」でも「純血」でもない

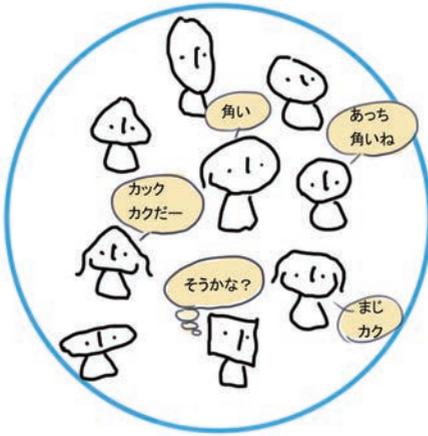
日本列島には、3万5千年ほど前から、いろいろなルートでヒトが移り住んだと言われます。本州より南の弥生文化は、渡来系の人々がもたらした技術によって誕生したと言われます。その後も、中国や朝鮮半島の色々な国家から人々を招いて文物を取り入れました。北海道にもオホーツク文化という、北からの渡来人による文化が広まりました。そうした渡来人は、在地の人々にとけこんできたと考えられています。つまり、アイヌも和人も、そのルーツとなる人の集団にはいくつかの系統があることとなります。その多様な人の集まりを、アイヌや和人という「1つの民族」として考えているのですから、やはり「民族」という考え方は移住の歴史が忘れられにくい新しい時期にできたようです。

しかし民族主義を強く持つ人は、自分の民族が大昔から変わらずに続いていて、

しかも「純血」だと思ひ込むことがあります。事実と合わない「純血」にこだわり過ぎる症状を「純粹民族症候群」と診断する研究者もいます（ブックガイド⑩⑪）。病気に例えることを不謹慎に感じるかも知れません。ただ、自分でも気づかぬうちに「純血」へのこだわりがうつっている所などは、病気に例えるのがわかりやすくもあります。

民族はチームやグループのようなものです。人々がおたがいにつながっていると、いう感覚・感情で成り立っています。毎日のように顔を合わせて、お互いの生活に関わっている人々とのあいだには「私たち」というつながりの意識ができていきます。その中には家族も含まれるでしょうし、近所の人、学校や仕事先の人もいます。「私たち」のメンバーが誰なのかは感覚的なもので、決まりはありません。転居などで、いつのまにか出入りが起こることもあるでしょう。また、人の行動範囲からいって、

A民族



B民族

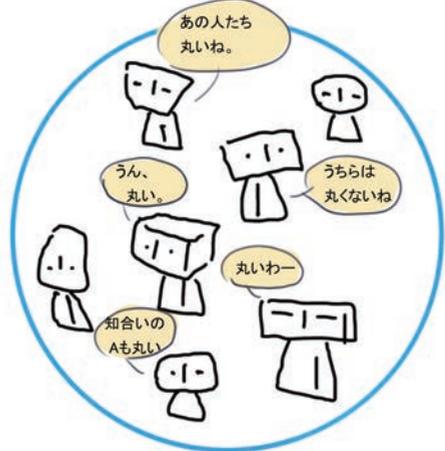


イラスト2. 「〇〇人らしさ」の実体視＝人種化

顔見知りのグループはそれほど大きくなりません。「同じ町内」や「隣町」までは身近に感じても、その向こうの町となるとよく知らない人たちです。ところが、近代になると、国家というグループのメンバーをハッキリさせ、さらにグループを大きくする動きが起こります。統一した大きなグループを作ると、外側には別なグループもあることが意識されます。

それぞれのグループの中には「地元」「隣町」「その向こう」などバラつきがあるのが普通ですが「あっちの人たち」という見比べる対象がで

きると、自然と「こっち」の一体感が増してきます。「純粋な日本人」という感覚は、こうした歴史の産物です。「私たち日本人の血には〇〇の伝統が流れている」。こんな言葉を聞くことがありますね。しかし、その「血」は、アジアやシベリア、南北アメリカ、太平洋の色々な地域と分け持っているものはずです。血によってあちらとこちらが分かれると感ずるのは、ぶっちゃけ気のせいでしょう。

今日私たちが思い浮かべる「民族」は、このようにして近代に入るところに「範囲」と「メンバー」をハッキリさせてきました。同時に、大きな勢力を持つ民族は近代国家を作ったので、この国家のメンバーとしてさらに「民族」の範囲・メンバーがハッキリしたと言われます。ところで「一民族一国家」という考え方もありますが、国が拡大しようとするときには、他の国や民族を仲間として統合していくことがありません。しかし、国を作った主要メンバー（民族）は、統合した他のメンバーを対等には

扱わないことが多く、民族によって待遇を変えました。つまり「仲間」とされた人のなかに「本当の仲間」と「新参の仲間」の区別がある、ダブルスタンダードです。日本で言えば「一等国民(内地人)」と「二等国民(沖縄・朝鮮)」や「旧土人(アイヌ)」との区別がこれにあたります(ブツクガイド③)。ここでも、ある民族のメンバーは誰かということが問題になりました。そこで、民族の範囲を説明するものとして体質(人種)や文化が注目されました。

「〇〇人とはこのような体質／文化を持つ人々のこと」。このような説明は、人々の多様さを見ないことにして「全員が同じような体質・性質を持ち、それは遺伝によって世代を超えて維持される」と考える中で作られてきました。ある人々をこのように見ることを「人種化する」と言います(ブツクガイド⑫)。大げさに言えば「沖縄は時間にルーズ」「関西人は面白い」「アイヌは信仰心に篤い」なども人種化です。

私たちは自然界に人種があつて、その人種ごとの性質があると教わります。本当は逆で、人間を感覚的にグループに分け、分けた理由を説明するために、目につきやすい特徴から人種を作つたと言われています。

体質（人種）による「境界」は作られたもの

ここでは詳しく述べませんが、人種は人々の間にある差別や支配を正当なもの、理由のあるものとして説明するために研究されたと言われています。ヒトの体には目の色、髪の色、骨の形など色々な違いがあります。たとえば、長頭・短頭という頭の骨の形で、ヨーロッパと非ヨーロッパを分ける説が立てられました。しかし、その特徴では、ヨーロッパの南北で違いが大きく、しかもオーストラリアの先住民族と北欧の民族が近いという結果が出ました。これではヨーロッパとアフリカ・アジア

を分けるのに不都合なので、この説はすたれました。あれこれ検討して、ちょうどよい特徴として選ばれたのが肌の色です。結論ありきの分類だったのですね（ブックガイド⑥）。多くの奴隷を所有していたアメリカの第3代大統領トーマス・ジェファソンは、アフリカ系の人々が生まれつき「劣っている」ことを証明するよう、科学者に依頼しました。そして、当時のアメリカに多かったイギリス系住民以外の集団が「劣っている」という「証拠」を探す研究がされ人種には、「能力差がある」という説が広まりました（ブックガイド⑬）。

【コラム①】「白人」かどうか、誰が決める？

アメリカでは、一六〇〇年代の終わりころから法律に「白人」という言葉が使われ、百年後には国勢調査で人種を聞かれるようになりました。「白人」とであると認め

られれば様々な優遇が得られます。日本では「白人」だと思われているヨーロッパ（イタリア、アイルランドなど）の人々も、かつてはアメリカに移住して白人としての待遇（市民権）を得るために審査を受けなければなりませんでした。アルメニア系の移民は、いちど白人ではないと結論が出た後に、科学者の意見によって白人と定義しなおされました。

今では、和人を白人だと考える人はいないでしょう。しかし、アメリカの日系移民が白人かどうかは一九二二年に裁判で争われました。ただ、いくら議論をしても白人かそうでないかを説明することは難しく、けっきょく「誰が白人かは、いま白人となっている市民が決める」という結論になりました。また、見た目が白人とまったく同じでも、たった「一滴」でもアフリカ系の血が入っていれば白人とは認められませんでした（ワンドロップルール「一滴規定」といいます）。人種の違いは誰にでもわ

かりそうできて、実は客観的には決めようがないのです（ブックガイド⑩）。

文化による「境界」

文化にも「進化」の考え方があり、最も「原始的」とされる狩猟社会から遊牧社会、農耕社会、産業社会の順に進化していくと言われます。これは、19世紀のヨーロッパの人々に広まっていた考えです。当時の自分たちの社会を人類進化の頂点と考えて、自分達とは異なる文化を「進化」の段階に置き換える、つまり文化のタイプによって、同時代の人を「原始的」や「野蛮」と見るようになったのです（「バカという方がバカ」みたいですが、人を「野蛮」呼ばわりする方が「野蛮」です）。

こうして、体質に加えて文化も、人々を区分する枠組みとして使われるようになりました。「狩猟採集文化」と「農耕文化」、「文字文化」と「非文字文化」は、スッ

パリすつきり分かれるものとされました。この区分をもとに「狩猟民族」や「農耕民族」という言葉が生まれ、それぞれの民族は狩猟または農耕「しか」しない、というイメージで使われます。また、文化の「進化」の度合いは、その民族の「生まれ持った」能力によって決まるとも考えられてきました。ですから、文化と人種は別な話題のようで、互いに強く結びついてもいます。

ところで、文化の範囲（分布）は人の集団と一致するでしょうか。中国（唐）やインド（天竺）の人と、こちら（本州など）の人という区分は古くからあったことでしょう。しかし、日本にくらす人の多くは中国文字（漢字）で名前を書き、インドや中国由来の宗教になじみ、東南アジア原産のイネを自文化の核心だと考えています。このように、人々が思い浮かべる「私たち」の範囲と、言葉や文化の境界は一致しないことがよくあります。しかしそれでも、文化や言葉で区分するのがわかりやすい



イラスト3. 混在する文化

とされたので、少々の矛盾は見ないことにしてそれぞれの民族を特徴づけました。江戸時代の和人は、アイヌは「文字を持たない」「農耕をしない」「獣のようだ」等々と、和人との違いを強調しました。反対に、アイヌと和人は祖先が同じに違いないから、アイヌの住んでいるところまでは日本だとする主張もありました（同祖論といえます）。

アイヌ語にも和人を指すシサムという言葉があります。また家屋（チセ）のうち、アイヌ風のをアイヌチセ、昔話（ウウエペケレ）のうち和人から伝わった話をシサムウウエペケレと呼びます。こうした言葉からわかるように、お互いの文化の違いはアイヌも意識していました。ただ、和人や北方の諸民族とも交易をし、さかんに

文化のやりとりをしてきました。そうしたネットワークはとなりの民族からとなりの民族へと鎖のようにつながっており、広く見ればアジア全体との共通点もありま
す。アイヌ民族は、和人からは狩猟民族と規定されますが、農耕を行い、自分たちで
育てた穀物で醸造酒を作る文化もあります。狩猟も漁労も採集も（対象や意味付け
などは異なっても）アイヌ・和人相互に見られるものです。

ところが、近代になると、和人の論理によって、和人とは「文化」の発展段階が大
きく違つとされるようになりました。同じように琉球、朝鮮、台湾といった地域の諸
民族に対しても、和人は自分たちとの間に線を引き、劣つた集団だと考えました。そ
して、この人々と見比べることによって、自分達を優れた民族、内部にあまり差のな
い「一枚岩」のような民族だと考えました。

これとは矛盾しますが、歴史研究によって、和人と他の民族が血統的・文化的につ

ながっていることは知られていました。そこで、日本人とはこうした集団・文化がとけあつて成り立つた民族だとする考え（混合民族論）もありました。これにはアイヌの土地や沖縄、朝鮮半島の植民地状況を正当化する意味もありました。もともと同じルーツを持つ民族だから、彼等を統合することは「劣った兄弟」に手をさしのべることあつて、支配ではない、というのです。もちろん、統合された側には大いに異論があります。また、実際には「手を差し伸べた」はずの相手を、和人は制度的にも感情的にも差別し続けました。例えば、どの民族にも日本語名を求めましたが、いつぱうで「内地人」との区別がつくように、異なる姓や字を使わせました。こうして文化の境界を無くそうとしつつ、新しい境界を作りつづけたことはその一例です。本当に1つになろうとするなら、そうした操作は不要なものです（ブックガイド④、⑭）。

マジョリティとマイノリティの関係

ときどき目にするこの言葉、マジョリティは「多数派」、マイノリティは「少数派」だといわれます。ただし、女性と男性の関係では、男性はほとんど同数の女性にくらべて優位な立場にあるといわれます。このように、社会の中で優位、中心的な立場をマジョリティ、そうでないほうをマイノリティと言うこともあります。

後にも書くように、マジョリティとマイノリティは背中合わせの関係にあります。「女の考えることはわからん」などという言葉のように、マジョリティはしばしばマイノリティを遠い存在に感じています。両者の生活・立場はぴったり結びついていません。そして「マジョリティである」「ことば」「マイノリティではない」「ことばによって成り立ちます。たとえば「右」とは何かを説明しようとする、「左ではないほう」としか説明できないように、「和人」とは何かを考えると「アイヌ」や「沖縄」

ではない、という説明になります。私たちが違いの「根拠」や「証拠」と感じているものは後からつけられたもので、実際にはそれぞれの立場があることによって、もう一方も成り立つのです。

「どっちもどっち」は成り立たない

マジョリティが優位な状態を「非対称的だ」と表現することがあります。不釣り合い、不平等とも言えます。マジョリティは、自分たちを中心に社会をとらえ、自分たちの考え・価値観を普通で当然のものだと感じます。実際には、それは独特の立場・文化であるわけですが、それを「誰にでも共通するもの」として、制度にしてしまう力がマジョリティにはあります。自分を基準として考えることはマイノリティにもあります。ですから「そんなのどっちもどっち」な気がします。しかし、マジョリテ

イは圧倒的に影響力が強いので、マイノリティが、自分たちの考え・習慣をマジョリティに通用させることはできません。理屈では「どっちもどっち」に見えても、実際はそうではないのです。なお、マジョリティに属す個人がマイノリティと親しくし、その考え・習慣を気に入って取り入れる事はありません。それでも、その考えが他のマジョリティに影響したり、社会の制度を変えることはめったにありません。社会のあり方を、個人力で変えることはたいへん難しいので、個人と社会はいったん分けて考えることにしましょう。

一般に多数派は「ふつう」、少数派は「特殊」に感じられ、言葉にもその感覚が表れます。例えば女性の医師を「女医」と呼びますが、男性の医師は「男医」ではなく単に「医師」「医者」と呼びます。「女神」ということはあっても「男神」とは言わず「神」と言いません。医師も神も、男性であることがふつうだと考えられていれば、わ

ざわざ「男」と表さないのです。「東京在住のミュージシャン」や「大学の教員」と言った場合、その人は和人だと理解され「和人ミュージシャン」や「大学の和人教員」とは言いません。その人がアイヌである場合には「アイヌ民族のミュージシャン」や「アイヌ民族出身の大学教授」と言うでしょう。また「障がいの当事者」や「同性愛の当事者」とはいつでも「健康体の当事者」や「異性愛の当事者」ということはありません。

これらの例で、特に名指されない方は、社会の基準・中心とされている立場です。「女医」や「障がいのスポーツ選手」、「アイヌの作家」は、個人である前にその集団に属する人として見られます。これに対しマジョリティは集団として名指されることが少ないため、自分を集団の一員ではなく個人だと見なしやすくなります。マジョリティは強い特権や力を持っていますが、名指されないことによって、普通は

集団であることも意識していません。

マジヨリティには、社会のメンバーを決める力があります。日本国籍を持っている非和人の多く、特に海外からの移住者（ニューカマー）が増加する一九八〇年代より前から日本国籍を持っている人々は、和人によって日本の内に取りこまれた歴史を持ちます。いっぽう、和人は「ハーフは純粋な日本人ではない」とか「生まれは〇人でも、もうすっかり日本人だ」等々と、日本人（和人）の線を引き直して誰かを正当なメンバーから外すこともできます。和人は文化的・血統的に多様なので「どこまでが和人か」を客観的には定義できません。そこで「白人かどうかは白人が決める」と同じように、誰が和人かは和人が決めるのです。その人がなぜ和人と言えるのかも、他の和人が決める。他の和人がなぜ和人といえるかは、さらに他の和人が…。

和人の中でも壮健な異性愛者の男性は、日本社会の様々な場面で正当なメンバー

であることを疑われることはありません。それだけでなく、正しいメンバーとして日本社会で活躍することを期待され、応援してもらえるでしょう。大相撲の話題で「久々の日本人横綱誕生」などというときなどには「日本人（和人）に頑張ってほしい」という期待がためらうことなく表現されます。いっぽう、外国人力士は、常に「本物じゃない」と言われるリスクやメッセージを感じざるをえません。外国人力士を脅威だと思っただとしても、日本社会全体が外国人に占拠されるわけではありません。少数の外国人の活躍を問題視して、暗に反感を示したり公然と嫌ったりすることは、強者だからこそできる行為です。

一方、マイノリティには「感情的だ」とか「向上心が無い」等々のよくないイメージがつきまといまいます。そのようなアウエーな環境で、自分が失敗すれば同じ立場の人全体のイメージが下がるというプレッシャーもかかります。

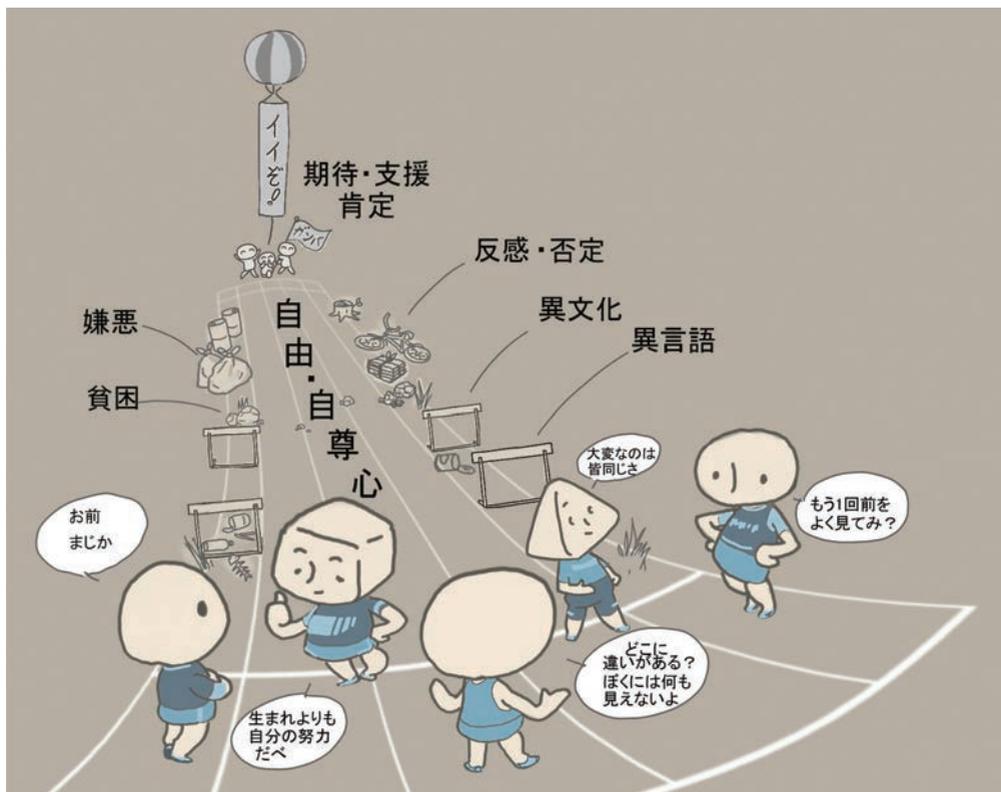


イラスト4. 2つの立場と景色のちがいが

今の社会では、マジョリティかマイノリティか、「ただ」どちらに生まれたかによって、大きな境遇の違いが生まれます。優位な立場に生まれた人も、せっかく努力して得た結果を「生まれで得をした」と見られることになりかねません。「こうした不均衡は居心地が悪い、個人とし

て生きたい」と思っても、社会の仕組み・しがらみから完全に自由にはなることはできません。しかし、立場の違い・不平等を自覚するのとは違うのでは大抵が違います、不均衡があるとわかれば、それを無くすための取組みも始めやすくなるでしょう。

【コラム②】「アイヌ民族を理解するために」

「アイヌ民族と共生」とか「アイヌ民族を理解するために」などと書かれたパンフレットなどを目にします。類似の表現は、障がい者や外国人、LGBTQなどのマイノリティにも使われます。「誰」が共生や理解をするのか書かないのは、多くの人に向けたものだからかも知れません。ただ、結果としてこうした取り組みは、壮健な異性愛者の和人が社会の中心であるという前提を変えることにはならず、むしろ強化

してしまいます。(P27、28 参照)

アイヌ民族のようなマイノリティの境遇は、マジョリティによって作られてい
ます(個人的な境遇には様々な場合があることはもちろんですが、それとは別に「アイ
ヌ」という集団として経験する境遇のことです)。これを変えるためには、マジョリ
ティとしての和人を見える化していくことが大切です。「和人とアイヌ民族を理解す
る」ことが共感を可能にしていきます。

社会モデル ― 「マジョリティファースト」な社会

マジョリティは、自分たちの立場・考え・習慣を、社会の標準、誰にでも通用する
ものだと考えます。すると、それに合わない人は「特殊」で、しばしば社会について
これない「手のかかる人」だと見られてしまいます。

身体に「障がいがある」があるというとき、長いあいだ、その原因は本人の体にあると考えられてきました。例えば車いすを利用する人（車いす派）は「歩けない」人とされ、体に何らかの治療をすることで「歩ける」ようにすることが目指されました。これを、「医療モデル」の考え方で見ている、と言います。

車いす派は、広い通路、トイレ、スロープ、エレベーターがあれば何も困らずに活動できます。そうなっていない建物が多いのは、それらが必要としない「徒歩派」のニーズだけに合わせた徒歩派ファーストな設計がされているからです。この点に注目し、障がい者の困りごとの原因は、その立場に応じた配慮が社会の側に欠けていることにあるという見方があります。これを「社会モデル」といいます。

車いすに合った配慮をすると「優遇しすぎだ」という声があがります。しかし、上に見たような設備を作ると「徒歩派」にとっても便利で快適であることが多いので

す。「徒歩派」はどこかに出かけるとき、そこに自分が使えるトイレ、エレベーターなどがあるか、交通機関は自分の乗り降りに対応しているか、といった心配をしなくて済みます。そういう意味では、むしろ徒歩派はもともと優位な立場にある（特権を持っている）のであり、さらに車いす派向けの配慮によっても恩恵をつけることができる、と考えることはできないでしょうか。

同じようなとらえ方は、他のマイノリティの場合にも応用できます。ある大学では開学から、何十年ものあいだ女性用トイレがありませんでした。学生が利用する階にはあっても、教員の部屋がある階には男性用トイレしかなかった、という例もあります。

言葉について見れば、札幌市内では、日本語よりも前から使われてきたアイヌ語を使うためのサポートは、ほぼありません。一部の大学で、専門的な教育を受け

る、市民向けのいくつかの講座で学べることを除けば、他にこれといってアイヌ語を使う助けとなるものはありません。役所、病院、学校、交通機関、警察、消防、裁判所など、くらしの中で大切な場所ではアイヌ語は使えません。どちらの困難も、社会が和人男性ファーストに作られていることによって起こっています。

アイヌ語を使うことが難しい理由を「時代の流れによって衰退した」とか「文字がないために研究ができない」などと言うことがあります。これはアイヌ語そのものの「劣等性」に原因があるとするスタンスです。しかし、非文字言語のアイヌ語は、和人が来る明治時代までは衰えることなく使われ、明治以降急速に使えなくなりました。このことを見れば、アイヌ語の現状は、和人の政府・行政による合理的な配慮（自分の言葉を使い続けることを保証すること）が無かったことによって引き起こされ、そのうえ「劣った言葉」として肩身のせまい思いをしていることがわかり

ます。社会モデルの考え方に立つと、個人やマイノリティの問題とされてきたことが、実は社会の問題であったことが理解できます。また、他の問題ともつなげて考えられるようになります。

【コラム③】アイヌに会ったことがない？ — カミングアウトとゾーニング

アイヌに限らず、マイノリティの当事者に会ったことがないという人は多いでしょう。「はじめに」に書いたように、その人の民族性は「根つこの体験」から決まります。もちろん「根」とは例えであって目には見えません。ですから、積極的に自分の根について話さなければ、その人がどういう根を持っているかは知られないまま。また、マジヨリティは、目に見える違いでもないかぎり「相手も自分と同じ、ふつう」だと思いやすいので、わざわざ相手の根を確かめたりしません。

では、積極的にカミングアウトをすれば良いのでしょうか。次の1から6は、アイヌ民族がカミングアウトしたときに実際にあった反応です。

- 1 「そうなんですか？私すごく関心があつて！」（そのわりに会話は弾まない）
- 2 「アイヌって知らないけどダサイと思う。技術が低いと思う」
- 3 「は？もうアイヌいないだろ」「いるよ、私アイヌだよ」「じゃあお帰り下さい」
- 4 （二、三步後ずやる）
- 5 「アイヌと最初から知ってたら友達づきあいしなかった」
- 6 「アイヌと友達になりたいっていう人がいるから紹介したい」
また、カミングアウトをしなくとも、もししたらどうなるかを知る機会は多くあります。その場にアイヌがない（二）ことになっている（二）ときに出る次のような会話です。
- 7 「昨日急に、自分がアイヌだったらどうしようと考えはじめちゃって眠れなくなった」



イラスト5 カミングアウトとゾーニング

- 8 「○○さんて絶対アイヌだよね」
- 9 「(和人数員が和人生徒に向かって)お前の顔、アイヌじゃないか？大丈夫か？」
- 10 「(和人数員が和人生徒に向かって)間違ってもアイヌと結婚するなよ。見分け方を教えるからな」
- 11 「アイヌって○○な人が多いよね」
こうした言葉が当人の耳に入ると、その人をずっとあとまで苦しめます。そこで、誰にでも自分の事を話さず、言っ

も平気な相手かどうかをじっくり見きわめてから話します。これを、話す場所と話さないところをわけることから「ゾーニング」と言います。身近で、信頼できる人には話しますが、たとえ身近でも話さない相手もいます。距離がある人ほど、話す機会も理由もなくなります。こうしたわけで「会ったことがない」としても「いない」ことにはならないのです。7は、実は話している相手がアイヌであることを知っていた例です。あえてシラをきりながら「もし私がアイヌだったらどうしよう（絶対に嫌だ）」と言って見せる当てつけです。こうした仮定（自分では知らなかったが自分はアイヌかも知れない）や、9（アイヌに見えるけど大丈夫か）のような発言が成り立つということは、誰がアイヌかは見ただけではわからないという事です。するとやはり「身近にアイヌがいればわかる、いたことがないからアイヌはいない」という感想には意味がないことになります。

なお、容姿でアイヌ民族と特定される人の体験は、先の8や次の12〜20のようなものです。

-
- 12 ジロジロ見られる。
 - 13 数人の和人が指を指しながら大笑いする。
 - 14 和人の前を通るときやすれちがうとき「アイヌ！」という声がある。
 - 15 「あなたたちは沖縄の人でしょ？」（北海道外で）
 - 16 「あなたあっちの方（アイヌが多く居住する地区）の人？」（北海道内で）
 - 17 「日本語上手ですね」と言われる。
 - 18 「国に帰れ」と言われる。
 - 19 公的な施設に入るとき「外人かい」と聞かれる。
 - 20 託児施設に子供を迎えに行くと、スタッフが外国人の子どもを連れてくる。
- 12 や 13、14 のような体験は、外見でわかる病気・障がいや異性装の場合にも起
-

りえます。私たちは「何気なく」人に目を向けることがあります、見慣れない人を無意識に見とがめていることもあり相手にとっては「監視をしている」というメッセージにもなります。日本社会で、子供に「人を無遠慮に見てはいけない」と教えるのは、それが無礼で、相手にとっては監視として受け取れるからです。「外人かい」と問う人は「日本人かい」と問うことではないでしょう。たとえ物腰がやわらかくても「どうしてここにいる?」と聞いているのと同じです。言い換えれば、ここにいるのはおかしいという意味になってしまいます。

ある人が、個人的にマイノリティを好意的に思っていたとしても、こうしたまわりの反応を引き起こすリスクがある中で「自信を持って名乗って」と相手に求めることはできません。マイノリティが見えないと感じる時、まずその人々がくらす社会を見直してみることで、わかってくることがあります。

【コラム④】アイヌ／和人の人口は？

アイヌ民族の人口は、正確にはわかりません。それには理由があります。日本の制度では「法の下での平等」といって「日本国民」を、民族性などによってさらに区分するべきでないという考えが基本になっています。ですから、今の制度の下では、国によってアイヌ民族の人口が調査されたことはありません。

ところで、和人の人口は正確には何人でしょう。これも実はわかりません。上と同じ理由で、日本国籍を持っている人の総数はわかって、その中にどの民族がどれくらいいるかはわからないのです。アイヌの人口がわからないと聞くと「そんな基本的なこともわからないのか」と驚く人が多いのですが、実は和人もそうなんです。

なお、一八七三（明治六）年の北海道では、人口十二万一三〇人のうちアイヌは一万六二七二人だったそうです（北海道庁調べ）。樺太アイヌは二千数百人、千

島アイヌは百人弱でした。

「和人と言われたくない」

これまでに、和人はマジョリティであること、マジョリティは世の中のルールを決めることができる(優位である)こと、マジョリティであるためにその立場が見えにくいことにふれました。民族共生の課題、つまり民族間の不均衡を考えるためには、見えにくい和人の立場を見える化することが最初のステップになります。

ところが、個人でも組織でも、和人という言葉を使うことに否定的な場合が少なくありません。興味深いことに、アメリカでも白人とされる人が、この言葉を使いたがらないという報告があります。アメリカと日本では歴史や制度がちがいますが、こういふ所で似た反応が起こるのです。

アメリカでは、肌の色の違いを見ないことにする考え方(カラーブラインドネス)が広まっています。「私は肌の色など気にしない、関係ない」として、肌の色によって起こる差別などないとするスタンスです。差別をなくすために良い考え方だとされていきますが、実際には差別を「ないこと」にしてしまい、差別についての議論がしにくくなってしまいます。しかし、マジョリティはこれをもっともいい方法だと信じているので「白人」という言葉によって、人種的な立場のちがいをハッキリさせると、かえって差別を起こすことになる、と考えるのです。もう一つ理由があります。「白人」としての立場、行為に名前が付くと、それまで指摘されず、無いことになっていた不平等がハッキリと見えてくるのです。特権的な立場を直視する居心地の悪さが、白人という言葉への怒りとなって表れるのです(ブックガイド⑩)。

日本では人種という言葉の代わりに、民族がよく使われます。「民族的」な特徴と

されるものは文化や気質に加え、外見（＝体質）にも関わるものであり、血統・遺伝によって伝わると考えられています。ですから、実際には人種と民族について言われていることはほとんど同じです。ともかく、制度の上では日本国には国民という一つの立場しかないことになっており、その中に複数の民族性があるということとは、ほとんど「触れてはいけないこと」になっています。アイヌ民族を指して、行政では「アイヌのひとびと」「アイヌの人たち」「ウタリの人々」「民族の人びと」などいろいろな表現が使用されています。二〇一九年に制定されたアイヌ施策推進法も、アイヌを先住民族だと明記しつつも、アイヌの人びとという表現を一貫して使っています。また、法律や諸制度の中で和人について触れたものではありません。うちなんちゅ（琉球民族）について、国連からは先住民族として位置づけるよう繰り返し勧告が出されていますが、それにもかかわらず、いまだにうちなんちゅを民族としてとら

えることさえタブーのようにされています。実際には立場によって保障される自由が大きく違います。アメリカの場合と同じように、格差が「あること」ではなく「あると言つこと」が悪だとされるのです。

「このようなわけで、アイヌと和人について話すと「自分は民族のちがいななどない」と思っている」、「アイヌも日本人（和人）も変わらない」、「差別者とは民族の違いを」とさらさら言い立てる者のことだ」といった反応が返ってきます。これらもアメリカでの例とそっくりです。

和人の優位性

「日本人（和人）にどんな特権があるというのだ」という意見もしばしば聞かれます。ここでもアメリカの白人と和人との間に多くの共通点が見られるので、ブック

- ガイド⑤・⑬の本を参考に、和人に生まれた人が置かれる環境を書き出してみます。
- 1 両親、祖父母はみな自民族（和人）の言語を話す。
 - 2 国内のどこでも、全ての生活・手続きを自言語で行える。「コミュニケーションが成り立たないときは、相手が言葉を覚える力・努力が足りないと考えることができる。
 - 3 先祖が住んだ土地を「自民族の土地」だと言える／考えることができる。
 - 4 保育所や幼稚園の先生は、自分と同じ民族だった。
 - 5 学校の担任は、ずっと自分と同じ民族だった。
 - 6 学校・地域で自分の民族語（国語）、民族史（日本史）、民族文化（日本文化）を教わった。
 - 7 教科書、教材に登場する人物、キャラクターの多くが自分と同じ民族だった。
 - 8 自民族は、他よりも優れた民族だと学校や地域、メディアで聞かされた。

- 9 給食には民族料理（和食）が良く出た。給食だよりは「伝統料理」や「郷土料理」として自民族の料理が紹介されていた。
- 10 友人のほとんどは自分と同じ民族。
- 11 町内の人も多くが自分と同じ民族。どこにいても少数派になることはない。
- 12 新聞、雑誌、テレビ、映画、街中の標識、地図などに自言語が使われている。
- 13 企業など組織のトップ、政治家の多くが自分と同じ民族。
- 14 地域にある銅像などのモニュメントの多くは自分と同じ民族。
- 15 テレビ、映画、CM、書籍、雑誌、新聞、街中の広告で目にする人は、ほとんどが自分と同じ民族か、あるいはヨーロッパ人。
- 16 出身地を聞かれない。そこにいることを不思議がられない。
- 17 「なぜそのような外見なのか」と質問されない。

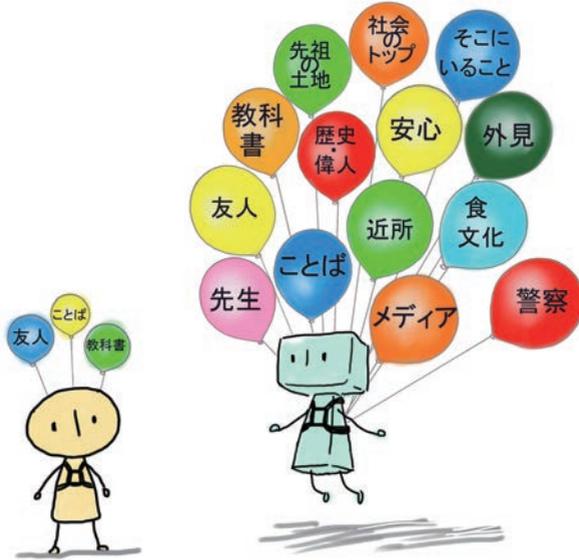


イラスト6. 自民族と結びつくもの／受け入れられているもの

- 18 警察を見た時に、家族が職務質問を受けるかどうか気にならない。
- 19 「差別を受けないように用心しなさい」と家族から言われたことがない。
- 20 家族の誰かが差別を受ける心配をしたことがない。
- 民族共生の議論に触れた和人の多くが、日本国内に和人以上の立場があることを知らないか、全く意識せずに生活してきたと言います。それは、このような環境で

過^こしてきたからでしょう。こうした経験を通じて、マジョリティは「世の中の標準・中心の人々」と自分を結びつけて感じる事ができます。自分がその場にいるのが自然なことで、そこで活躍することを期待されていると感じながら成長します。アイヌのような非ヨーロッパ系の民族的少数者にとっては、1から20の多くが正反對なのです。7の教科書は近年アイヌ民族の記述が増えていますが、それは明治以前の非常に古い時代に限られています。1から15は想像したこともなかった、という人も多いでしょう。

「善悪」の問題ではない

民族性のほか、性別や心身の状態など他のマジョリティ・マイノリティの関係について見ていくと、健康で異性愛者である和人の男性が、特に優位性を持っている

ことが浮かび上がってきます。これは、善悪の問題以前に事実です。立場の違いを善悪に結びつけてしまうと、こうした事実をまっすぐ見ることも難しくなります。もちろん、個人の経験の違いも大きく、ここでは触れていないような経済的な問題や家族・周囲の人との人間関係など、いろいろな壁を感じている人もいます。しかし、それらはマイノリティも経験することでもあるのです。不利な立場に生まれた人と同じく、優位な立場に生まれた人も、自分で選んでそうなったわけではありません。立場の弱い人を見下したり、自分の特権を利用して相手を脅かしたりすることとは不当ですが、たまたま特権的な立場に生まれたことが悪いわけではありません。ただ、現実にある不均衡を維持したいか、変えたいか、ということは問われます。そのとき、立場の違いを「無い」としてしまうことは、結果的には不均衡な現状の維持につながるのです。「ぼくは立場の違いを気にせず、垣根なく付き合いたい」と言っ

てみせることは、優位な立場の者には満足感が得られても、マイノリティには意味がありません。むしろ、自分が優位にあることを隠す、あるいはマイノリティからの指摘にまともに取り合わない態度として呆れられるかも知れません。

【コラム⑤】ジェンダーギャップ

和人の「見えない」優位性は、ふだんは気づきにくいという点で女性に対する男性の優位性とも似たところがあります。男性は、「男の生き様」のように男性をアゲる表現は別として、それ以外では男性という立場に結び付けられることなく過ごしています。社会を公的な場面（学校、職場、地域など）と私的な場面（家庭）とに分けると、評価や報酬の対象となるのは公的な場面です。そして、公的な場面は、これまで男性を基準としたルールが適用されてきました。ですから、男性に生まれた人は、

女性に対してかなり優位な立場にすることになります。和人としての立場にとまどう心理は、男性としての優位性を指摘されたときのものと近いといえます。どちらも、望んだわけではなく気付かぬうちにその立場にあるからです。

差別

ここでは差別を「区別と蔑視と排除」の3つが組み合わされて起こるものと考えます。2つの立場を分けるだけでは差別は起こりません。片方が否定的に扱われるときに差別が起こります。このとき差別者と被差別者という2つの立場ではなく、共犯者を加えた三者の関係で考えます。差別者が差別的な考えへの共感・同化を求め、共犯者がこれに応じること（同化）によって差別・排除が成立します。（ブック

ガイド⑦⑬）

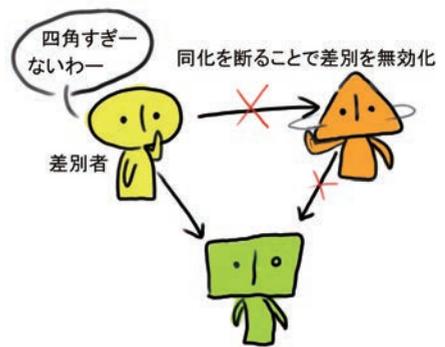
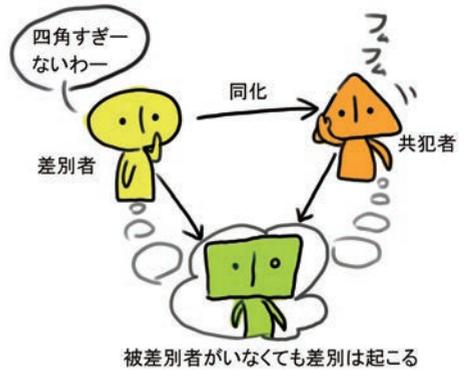
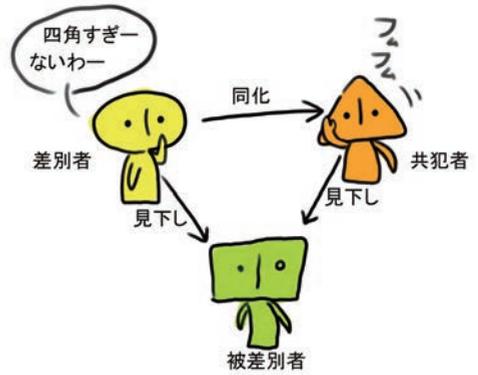


イラスト 7. 差別の三者構造

共犯とは「悪意を持って同意すること」だけでなく、保身のためにだまっている、あいまいに笑って問題を指摘しない、といったことなども含まれます。また、差別は差別者どうしの結びつきを強める目的で行われることもあります。この場合、被差別者がその場にいなくとも、差別的な発言が意味を持ちます。(イラスト7中段) ジョーク、口調、仕草などによる見下しの表現、無意識の発言など問題化しにくい差別も

あります。反対に、人をやたらに持ち上げることも、居心地の悪さを生みます。これは「聖化」という、差別の一種です。

こうした差別が社会に定着すると、個人の方では制御できない、制度のように世の中の仕組みに埋め込まれた差別（構造的差別）が生まれます。この差別は、個人的な良心や悪意と無関係に作用しますし、意図してすることもないため、差別があることが見えにくくなります。こうした社会では、差別に関わらずにくらすことは不可能ですが、マジョリティである（被害を受けない）場合は、そのことに気付きにくくなります。

・なぜ差別があるのか

アイヌ民族に対する差別の根底にあるのは、経済的な効率の重視でしょう。アメ

リカの人種差別も、奴隷に対する支配と搾取が先にあり、それを説明するために人種主義が考え出されたと言われています。つまり白人と非白人ははっきり分けることができ、非白人には人格から能力まで問題があるとされ、自由や平等、尊厳の対象ではないとされました。

江戸時代の中頃以降の和人の書物にも、アイヌが異質で文化的に低いであるとか、放っておけばいずれ滅びると書かれ、和人による支配、排除、生活のあらゆる面への介入や権利・資源のはく奪を正当化する根拠となっていきました。明治期になって近代国家が作られると、均質な力・資格を持ったメンバーによる強大な国家が目指されました。そうしたとき、アイヌや琉球（沖縄）のような異民族は、そもそも異質視されていましたし、日本語の使用など和人であれば当たり前に行えることができない、半人前で生産に貢献しない者と見なされました。

また、文化・容姿・知能などについての偏見から、婚姻など私的な場面でも差別を受けるようになりました。

差別を見えなくするもの

・「善悪」とは分けて考える

世の中の仕組みに埋め込まれた差別は、避けることがむずかしく、良い人も悪い人も関わってしまいます。また、人は自分が育った社会の考え・ルールを無意識に身につけながら成長します。ある人々に対する「悪い見方」も、意識して避けなければ、いつのまにか身につけてしまうのです。「差別をする・偏見を持つことは悪人のすることだ」と考えてしまうと、自分が身につけてしまった偏見を認め、それをなくす努力のきっかけがなくなります。さらに、否認をすることに必死になってしまう

「ことでもあります。」

・和人中心主義

和人としての考え・見方を標準的で中心的な、誰にでも当てはまるものとする考え方のことです。北海道は「歴史がない」とか、明治に入ってから「開拓」されたといった歴史観は、アイヌ民族の存在を無視した考え方の典型的な例です。「北海道は日本、日本にいるのは日本人（和人）、日本にいたら日本語を話すのが当たり前、北海道の『開拓』には問題がなかった」という感覚は、人々にゆきわたっており、多くの人に、悪意はないでしょう。しかし、この感覚は、それ以前の人びとのくらしを価値の無いものと見なすこととセットになっています。それ以前のくらしが「開拓」によって破壊されたとしても「開拓」の方が、優れた価値のある行為ならそれを正当化

できます。「開拓の歴史」は、立場が変われば美しくも感動的でもありませんが、これが「ふつう」の見方で、これに替わるものは無いとしたとき、結果的にアイヌ民族を低く評価し、消し去ってしまうことになります。ですから人々が開拓史観など、他者を認めない考え方を受け入れたり、広めたりするだけでも、少数者はより居心地が悪くなります。このように、直接的・意図的な差別ではなくとも、アイヌ民族を押しさえつけ、社会からしめ出す仕組みは成り立ってしまいます。アイヌなどの少数者は、不本意でも和人の価値観に歩み寄らなければ生活ができません。このことがますます他の人の立場に気付きにくい原因となります。

「ここではあえて「和人中心主義」と名前をつけていますが、このような言葉はほとんどにも使われていません。和人の民族主義的なルール作り、社会の運営、学校教育などは「ふつう」のこととされています。ですからアイヌ民族について年に数時間学ぶことを「アイヌ文化学習」と呼び、その必要性は議論されても、日本語や日本史

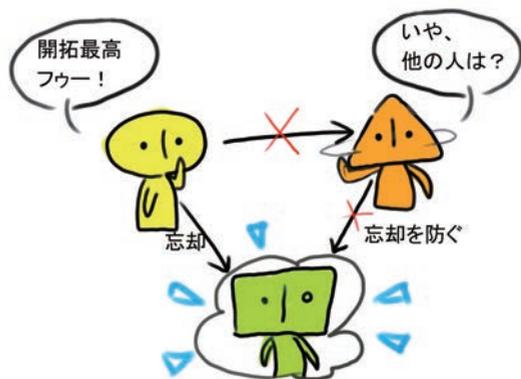
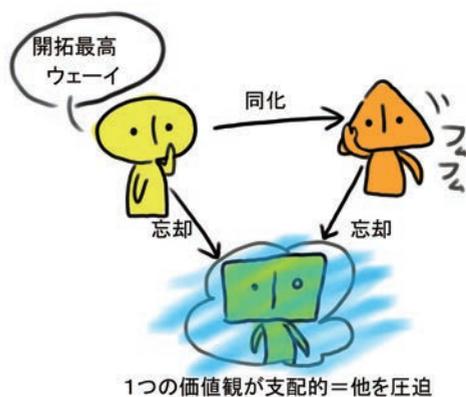


イラスト8. 1つだけの価値観だけを認める姿勢が他を圧迫する

などを百時間以上学ぶことは当然とされます。客観的に見ればこれは和人の民族教育ですが、あくまで「ふつう」の学習だとされているからです。和人の民族主義が見えないことで、このよう極端な格差がそのままになっています。排外主義やヘイトスピーチを見て心を痛める人も、和人中心の見方が起こす問題は見落としがちです。このことに気付けば、それを改めようと考えerことはそれほど難しくありません。

・公正世界信念

人々は自然な心の働きによって、自分のくらす社会を正しいものと見ようとし、努力をすれば、それに見合った成功やみかえりがあるはずだと考え、それによって前向きにくらしていきます。もし、これに合わない事実があったとき、例えば努力をしているのに生活が安定しない人がいたとき、人々は社会よりも困っている人を

疑いやすいといえます。何か、その人自身に問題があるのではないかと考えてしま
うわけです。

いじめ、性暴力、DV、パワハラなどと同じく、民族差別についても被害者を攻撃
したり、加害者を特殊な人と見たりすることがおこりがちです。また、被害者自身
が、自分を責めてしまうことも共通しています。実際には、条件しだいで誰にでも加
害・被害の可能性があります。

・差別をなかったことにする — 「否認」

抑圧・差別はしてはならない、という価値観は、社会に共通の前提となっていま
す。また、いま見たような差別が見えにくくなる仕組みもあります。そのため、マイ
ノリティへの抑圧・差別については正当化（差別ではない）、緩和（差別だがそれほ

ど重大ではない)、弁解(理由がある)、否認(みとめない)という反応が起こりやすくなります。否認のパターンとしては、やっていない(行為の否認)、わざとじゃない(意思管理の否認)、そういうつもりじゃない(意図の否認)、そのためにやったのではない(目的の否認)などがあります(ブックガイド①)。

否認は、ただの言い訳に終わらず、新たな加害となります。

逆差別(マジョリティ差別)

女性と男性、同性愛者と異性愛者、移民と在住民。これらのペアでは、後の方の立場が常に主流・標準であって、世の中のルールを作っています。するともう一方(女性、同性愛者、移民)は不利な立場に置かれますので、配慮によってバランスをとることが求められることがあります。要求が実行に移されることはめったにあり

ませんが、不均衡をなくす取り組みを求める声を聞くだけでもマジョリティは圧倒を感じ「弱者／少数者に配慮しすぎだ」「こうした取り組みは逆差別だ」という声があがります。これは日本でも韓国でも、またアメリカでも同じことが起こっています。アイヌ施策にも同じような反発があります。2つの話を紹介します。

1 二〇一六年に、札幌市でアート活動をしている人が、アイヌ民族に向かって「このごろ、行政がモニュメント設置などアート関連の取組みをすると、必ずと言っていいほどアイヌを絡めてくる。創作をする者は嫌でもアイヌに関わらないと仕事を得られないプレッシャーを感じている。北海道の風景にはフランスの文化の方が似合うし、自分はアイヌには関わりたくないのに」という不満を述べました。

2 二〇〇〇年代に白老町という町で、アイヌ施策の在り方を検討する委員会が

設置されました。そこに参加した町の職員が「アイヌは行政に頼り過ぎだ。行政はやめることはやっている。残る問題は自分達で努力して解決しなければならない」と自説を述べました。

これらは事実でしょうか。「札幌市野外彫刻管理台帳」を見ると、二〇二二年二月の時点で、札幌市が設置しているモニュメントは四一五点、そのうちアイヌ民族に関連するものは〇点です。いっぽう「拓く」「風雪百年」「開拓の鼓動」「屯田の夜明け」など、明治以降の和人の歴史をテーマにしたと見られるタイトルの作品は10点ほどあります。他の作品も、和人に向けたものが大多数でしょう。この台帳には載っていませんが、札幌駅の改札周辺や地下道などに、木彫、タペストリーなどが展示されています。それらは二〇〇〇年代になってから設置されたものです。つまり、札幌市の芸術関連の取組みのうち、在地の文化であるアイヌ文化に関する物は、実際に

は圧倒的に少なく、また20年ほど前まではほとんどなかったということです。明らかにバランスが悪く、今日でも比重は外来文化に大きく傾いています。そのわずかな作品の設置も、目障りだと感じているのです。おそらく発言者には差別をしている意識はないと思いますが、在地の文化や人を共存不可能なものとして拒絶していることは明らかです。マジヨリティはしばしば「嫌う権利」を行使しながら、逆差別を主張します。相手を公然と嫌うことができるのは、力を持った者の特権です。その状態があまりに「自然」になっていて、疑問を感じないのです。

2について、行政に対してアイヌは求め過ぎだ、と言っていることから、この職員は行政とアイヌを別な立場だと考えていること、行政は和人主体の組織だと考えていることがわかります。そしてアイヌ施策は行政の責任ではなく「善意」や「施し」だと感じていることもうかがえます。アイヌ施策とは、アイヌが自分たちのくらし

を維持しながら、言葉や文化を自分達のものとして守っていくためのもので、これは和人には当然に認められているものです。町内の小中学校、高校では日本語で日本文化を教え、町教育委員会が発行する『白老偉人伝』には和人しか出てきません。

白老町が二〇〇〇年代に制定した条例の条文等には、同町は「アイヌ」と「わたしたちの先人」が苦勞をして築いてきたと書かれています。アイヌは町民に含められておらず、存在や尊厳が認められていないことは明らかで、これを改善することは当然の要望です。このような場合でも和人の行政職員には、「不平等は存在せず、アイヌからの申し立ては不当な要求だ」と断定する権力があるのです。

もう少し複雑なケースもあります。アイヌ文化の普及に関連する活動（文化の保存組織・観光業・博物館・教育機関など）では、しばしば和人が弱い立場にあるとされます。同じ場所で働くアイヌも、和人に同情的になることがあります。その理由を

小グループ



イラスト9. 小さなグループではアイヌが優位

考えるため、「ここ」では「場所」と「立場」の2つに注目してみます。

文化普及活動は、社会という大きな人の集団の中で行われています。その中には小さなグループがいくつもあります。例えば、市民が行っている文化継承の会や工芸家の組織を考えて見ましょう。こうした活動は、初期にはアイヌの有志が立ち上げ、そこに集る人もアイヌが中心になります。中には異文化としてのアイヌ文化に関心を持った非アイヌが参加することもあります。これを当事者運動だと考えれば、主な担い手が

アイヌ民族であることは自然だと思えますし、もともと経験や知識を持っている人は中心的な立場につきまます。和人は、特に数が少ない場合には、肩身が狭い思いをするかもしれませんが（イラスト9）。

いっぽう、和人は全体としてアイヌよりも経済・教育の水準が高いというデータがあります（平成29年「北海道アイヌ生活実態調査」）。ですから、この小グループの外に出れば、裕福で高い学歴を持つ人として、多くのアイヌよりも優位に立ちます。また、時間がたつて経験豊富なメンバーが引退していくと、経験があり学歴などの権威も持った和人が、アイヌの小グループの中でも優位になっていくことがあります。さらに、和人はアイヌ民族・文化に向けられた偏見からも自由であるという点は重要です。

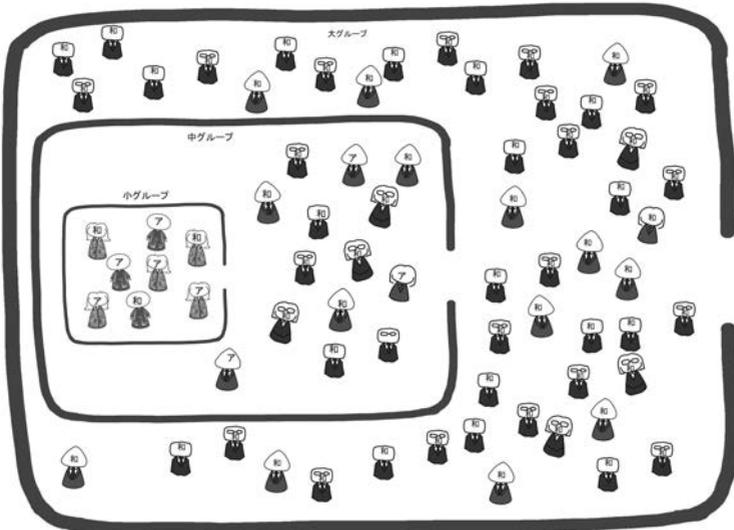
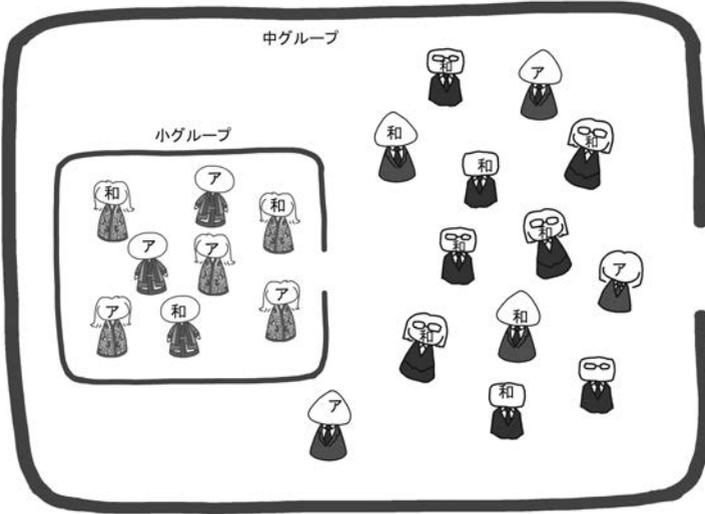


イラスト 10. 中・大グループでは和人が優位

そして、組織の活動に公的な支援をするとか、組織の活動を公教育の中に取り入れていくといった制度を作る力は、和人が持っています。例えば「イオル事業」やアイヌ施策推進法による交付金事業などの多くは、行政や大きな企業が主導して事業のデザインをし、予算の配分も決定します。ですから、小さなグループの中の和人は、そこではマイノリティに見えますが、全体としては優位なグループにも属しています、時には大きな事業を動かす場合もあります。

同じことはウポポイや大学のような組織の中でも言えます。自営の工芸家や音楽家、芸能を保存する会など、特に観光客や施設利用者向けのプログラムを実施する小グループの中ではアイヌの比重が高く、また経験などの点でも優位になることがあります。予算を持っている管理的なポジションの中規模グループになると和人の比重が増し、さらにアイヌ施策の方針を決める官庁となると、大部分が和人による

組織でしょう。

管理的な立場には、男性が多いことも指摘できます。小グループのメンバーは民族衣装やアイヌ文様の入ったユニフォーム、管理者はスーツ、という服装にも意味があります。民族衣装は、アイヌにとっては大切なものです。しかし、日本社会の中で、それも冠婚葬祭などと関係なく常にそれを着ていると特殊な人のように思われ、悪い言い方をすると、アトラクションの一部、色物のように見られてしまいます。高いポジションの和人は、アイヌ文様が入った衣服を着るなど、アイヌと同じ立ち位置に立つことを拒む場合もあります。

人々がどこで接するかによっても、感覚は変化します。一般的に官庁や管理者側の人びとは強い決定権を持っています。しかし、小グループの活動を視察したり、文化的行事に参加したりする場合には、現場の指示を受ける立場になります。ここで

は、管理者は笑顔で着物を着て、受け身の立場になります。

小グループのメンバーはその場を主導する立場となり（それほど）緊張しないかもしれませんが。しかし、ふだんは小グループのメンバーが、スーツを着た管理者の場に立ち入るときには、意識しなくともプレッシャーを感じているかも知れません。仮に何かの交渉をしに行ったとしても、要望を自由に出せるとも限りません。さらに上の官庁の職員には、直接話す場ありません。（イラスト11）

小グループの内では、立場の弱い和人に心無い言動がされることもあります。また、アイヌの内でも和人の内でも、ポジションによる格差が大きく、そこに民族的な格差も重なって事情が複雑になっています。自分の直面する理不尽さは、相手にも起こりうることを知って、格差を無くすために歩み寄る必要があります。アイヌ施策において、アイヌが主体となって取り組みを進めることと、アイヌも和人も理不

尽な差別を受けないことは両立できません。

なお、組織などの一部にでもマイノリティを採用すると、公正な職場であると思われるようになりますし、組織はそのことをアピールします。これをトークニズムといいます。トークンとは「証拠」という意味で、ここではアイヌ民族を部分的に採用することが公正さの「証拠」となっています。例えばイラスト10のような組織でも、実際よりマイノリティの存在感が高いような印象を与えることがあります。このようにマイノリティの採用が強調されることも、マジョリティが「逆差別だ」と反感を持つ理由になります。

第2章 誰がアイヌ／和人なのか

人々が考える「民族」の枠、自己決定の大切さを見ていきます

アイヌか和人か、誰が決めるの？

P17～24で見たように、人種や民族は、はっきりした根拠があつて考えられてきたわけではありません。アイヌ語は日本語と大きくちがうので、アイヌ語を話す人がアイヌ、という考え方もできませんでした。しかし、アイヌ語を身に付けて通訳の仕事をする人や、たまたまアイヌ語ができた和人もいたことでしょう。また、アイヌと和人の間に生まれる子供も多くなりましたし、歴史的にも関わりが深いのですから、血統ではっきりと線を引けるわけでもありません。ここでは「アイヌと和人を線引きすることは難しいから、違いはない」と言いたいものではありません。はっきりと

分けることが難しいのに、社会的にはアイヌと和人どちらに属するかがとても大きな意味を持つていることが重要なのです。

そして、誰がアイヌ／和人かは、和人が決定してきました。例えば、北海道庁や各市町村のアイヌへの公的支援の利用は戸籍によって血縁を証明できる人に限られ、各関連団体の会員資格よりも狭く設定されています（第7回『北海道外アイヌの生活実態調査部会』議事概要）。いっぽう、私的な場では、そのような証明と無関係に、アイヌとされたものが排除や侮蔑を受けます。誰がアイヌと見なされるかは場面によって変わり、一貫性がありません。ただ、アイヌの枠を狭めたり、和人の枠から排除したりと、常に和人がルールを作っています。

【コラム⑥】 どうやって日本国民になるの？

日本国民の要件は憲法第10条に「日本国民たる要件は、法律でこれを定める」とされています。一九五〇年に国会が国籍法（昭和25年法律第147号）を制定しました（二〇一八年に改正）。この法律では、日本国籍を持つ者を日本国民としています。そして、2条3項では、「日本で生まれた場合において、父母がともに知れないとき、又は国籍を有しないとき」には日本国民とするとしています。つまり血筋がわからない場合でも、日本で生まれれば日本国民とする、ということです。また4条では、「日本国民ではない者（以下「外国人」という。）は、帰化によつて、日本の国籍を取得することができる」と定め、海外諸国で暮らしていた日本国籍のない者、つまり外国人が、日本国籍を取得して日本国民になることができる法制度となっています。このように、日本国籍を持つ人には、様々な人種・民族にルーツを持つ人々が含まれ

ます。したがって、日本は、法制度と現状のいずれにおいても、単一民族国家ではなく多民族国家だといえます。

どこでアイヌ／和人だと感じるの？

自分や他の人をアイヌか和人か（または他の民族か）と考える時、何がポイントになっているかでしょう。多くの人が意識するのは、体質（外見）、文化、出自の3つではないでしょうか。あらかじめ書いておきますと、体質や文化はあくまでイメージですし、そういう要素が「ある／ない」のどちらかではなく、イラスト12に示したように少しずつ違いがあります。このように書くことでイメージを強めてしまうことになるかもしれませんが、ただ、イメージでしかないものが、現実の人のくらしを強くしぼっていることを知っておく方が良いでしょう。また、これから書くように

血縁も絶対のものではありません。どの場合にも大切なのは、その人が持ち合わせたいろいろな条件のうち、何を重視するかは本人が決めることだと言う点です。他の人が介入したり、相手を「●●人だ」とか「●●人でない」などと決めつけたりすることはあつてはなりません。

1 体質のこと

和人にもアイヌにも様々な体質の人がいます。これまで見てきたように、人種・民族が違えば体質も違うという発想は思い込みです（↓p17）。

和人の中にも彫りの浅い顔、深い顔がありますし、まつすぐな髪にカールした髪、骨格など、どの点を見ても個人差があります。「日本人らしい顔」という表現もあり

ますが、では、その顔立ちに合わない人は和人でないことになるのか、といえませんが、ではありません。

江戸時代から明治頃にかけて、和人がアイヌを描いた絵が多く販売され、その後は写真や絵ハガキが売られました。これらは商品ですから、和人と違って見えるように誇張しモデルには顔立ちのハッキリした人を選びました。「アイヌらしい顔」のイメージも、これによって偏ったり固定化されたりしてきました。

こうして出来上がったイメージは、現実に影響します。体質は内面の要素と違って目に見えるので、その人のイメージに大きく関わります。和人がアイヌの体質や容姿に言及する時には、次のような表現がしばしば見られます。

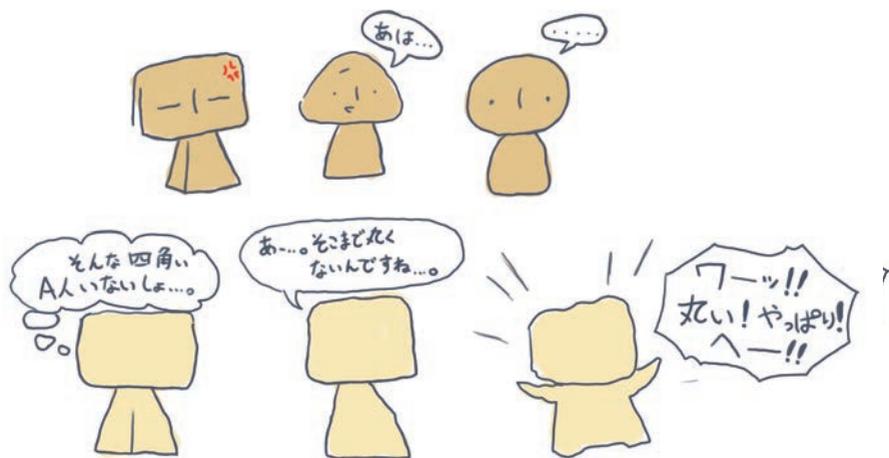


イラスト12. 民族=体質のイメージ

- 1 「●●に毛が生えているのはアイヌだ」
- 2 「ギョウウジャーニンニクという山菜は臭いからアイヌネギというのだ。アイヌは臭いから」
- 3 「同じ学校のアイヌは差別されていなかった。ただ、勉強ができず、臭かった」
- 4 「(和人の元教員が)アイヌの生徒は顔でわかる。子供の頃は可愛いが、大きくなるとアイヌ性が出てくる」

これらは全体的にネガティブな印象があります。今日の日本社会では、体毛があるべき場所は決まっっていて、それより多くても少なくとも否定的に見られます。体毛や体臭の否定的なイメージを強める広告・商法が問題化していますが、アイヌ民族には右のような先入観があるぶん、より深刻な影響を受けます。顔立ちについては4のように肯定的に評価されることもあります。それも社会的な地位を変えるものではありません。体臭は衛生観念や文化の水準と結びつけられ、見下しの対象となります。

また、周囲がアイヌだと知らない／意識しない状況で体質だけをからかわれたという人もいます。そうした体験を語るとき「アイヌだからというのは別だけど」と前置きをすることもよくあります。ただ、アイヌの被差別体験から連想して体毛の話題が出るということは、イメージの中でアイヌらしさと体毛が強く結びついてい

ることの表れでもあります。

和人の中にも「毛深いことを笑われた」「顔立ちの違いをからかわれた」「体臭が強
いことが気になる」という人はいます。アイヌ／和人の間にも、もっと細かなポジシ
ョンのちがひがあります。それぞれの経験はたがいに完全に同じではありませんが、
少しずつ似ていて、つながっていることもあります。このとき「自分も気にしないか
ら、あなたもそうすればいい」と考えるだけでは、実際の経験のちがひや、自分が思
うより相手にとっては深刻であるかもしれないことを見落としてしまいます。相手
との違いを知らながら、しかし自分と相手がぶつかっている壁に共通点があること
も知っていれば、それぞれの壁と向きあっていく中で、共感を育むこともできます
(ブックガイド⑧)。「この場合でいえば」「ぶつこの体質」から外れるとして排除や見
下しを受ける人々は、完全に同じではないけれども協力し合えるということなのです。

2 文化のこと

和人らしさとは何か、と問われたら、何と答えますか。仕事でいえば漁業や米作りなどでしょうか。他に、日本語を話して、寺社仏閣に参ること、和食などの食生活や遊び、伝統芸能、「和の心」などが思い浮かびます。日本語は今日でも使われていますが、日々変化しています。農業も漁業も後継者の確保が悩みの種です。また、稲作や仏教などの外来の文化も多く、定着した時代にもバラつきがあります。近年になって注目されたり、復興されたりしたものもあります。

アイヌ民族の場合には、狩猟、漁業、採集、宗教や口承文芸などが考えられます。といっても時代や地域ごとのちがいもありますから何か一つ「本物のアイヌ文化」があるわけではありません。また、多くの人にとってこれらは身近なものではないでしょう。アイヌ語や物語、歌・踊りや楽器、工芸、いわゆる伝統料理などに触れた

経験が、アイデンティティ形成に影響するケースが多く見られます。しかし、そうした体験は必須のものではありません。今日では、和人の伝統芸能、工芸、祭礼等にはとんど触れずに育つ和人も多くいることと考えられますが、それによって和人としての立場が危うくなることはありません。喪失感をもつことはあるかも知れませんが、「もはや和人ではなくなってしまった」と言われたり、存在や主権が疑われたりすることはありません。また、ある程度は学校や地域で教わることができることも重要です。アイヌ民族の場合には、公教育では自文化に触れる機会が用意されていません。それにも関わらず、いかにもな文化体験をしたことがないと「文化的独自性を失い、民族としては消滅した」などと簡単に言われてしまいます。

これは必ずしも悪意ではなく「民族が違うなら、何かそれらしいものが目に付くはずだ」という素朴な思いこみによるところもあるでしょう。しかし、そういう予測

や期待は、一方的でうかつなものだといわなければなりません。困ったことに、アイヌ民族自身もまわりの目を気にして、それらしい何かを身に付けていることが「アイヌらしさ」であるような気になってしまっています。自文化に愛着を持って学ぶこと自体は自然なことですが、問題はそうした機会や動機を持たない人が、民族性まで否定されてしまうということです。

また、意識して在来の文化を維持しようとしている人は、そうした経験や知識を持たない人に対して「アイヌなのにそれも知らないの」などと言ってしまうことがあります。そうしたことの積み重ねで、多くの人が「自分は血を引いていてもアイヌらしいことを何も知らない」と感じています。和人の場合と比べて、アイヌ民族がアイデンティティを持つハードルは、とても高くなっています。

3 血縁のこと

その民族の親類や子孫であること。これは自分がその民族の一員であると感じるうえで、基本的なことです。まったく縁もゆかりもない民族を、自分の一族だとは感じません。もちろん人類史的に見れば誰でも血縁といえるでしょうから、ここでは自分達とは違う集団を意識して、それぞれ「アイヌ」や「和人」と呼ばれるようになった時代の人と、自分のつながりが意味を持ちます。

「私は和人だ」という人に、なぜそう感じるのかを質問してみると、最も多い答えが「両親が和人だから」というものです。「では、両親はなぜ和人といえるのか」と続けて質問すると「その親も和人だから」となりますが、この辺りで自信がなくなってくる人もいます。さらにいうと、いつの時代の先祖から和人（日本人）という自覚があったのかはわかりません。二〇〇〇年前の先祖に会えたとして、あなたは日

本人かと尋ねたら「ちがうよ」と言われるかもしれません。

今日では親類についての意識も変わってきていますが、明治頃までのアイヌ文化では、結婚や相続、葬儀、祖霊祭をする上で女系・男系が大きな意味を持っています。女性は母親や祖母、曾祖母など女性の系統、男性は父親、祖父、曾祖父など男性の系統を受けついでいるとされていました。人々はなるべく家系が途絶えないようにしましたが、もっとも、家系は必ずしも血縁にかぎったものではありません。養子によつて、よその家系にはいることもありましたが、和人など他の民族と結婚したり、養子をもらったりすることもよくあります。その子供はアイヌの子として育てられ、その家の系統に入つて家族の行事をになうメンバーになりました。

自分のルーツを知っていることは、必ずしも当たり前ではありません。何かの事情によつて生まれや親類の事を知らない場合があります。アイヌ民族のような民族

的マイノリティの場合は、被差別リスクによってそのことを言いづらかったり、意識しないようにしたりすることがあります。次世代のリスクを軽くするために、ルーツのうちリスクのない家系だけを知らせることもあります。そのようにして、ルーツがわからなくなった人が、ふとしたきっかけでルーツを知り、親類や同じ地域にルーツのある人を探したり、文化に関心を持ったりすることもあります。このように後から得たアイデンティティを認めるかどうか、という議論もありますが、そもそも他人が口をだすのはおかしなことです。

いっぽう、成人するまで出自を知らなかったということは、それまで被差別体験がなかったということかも知れません。その意味で、アイヌどうしの経験はすべて重なりあっているわけではありません。相手との経験・感覚の違いがある可能性を知っておくと良いでしょう。

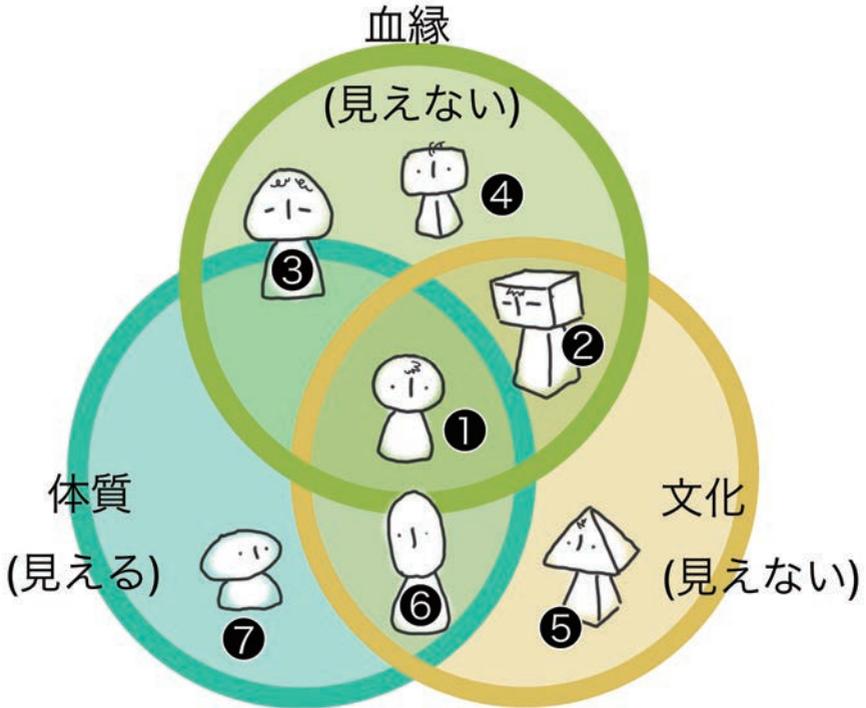
アイデンティティは重なる・変化する

イラスト13は、血縁、文化、体質の要素を3つの輪で表しています。①の人は、血縁・文化・体質の輪が重なる、つまりこれらの要素をあわせもった人です。むかしは「民族」という言葉をつかうときに、このようなそれぞれの面で他の人と区別できる人を想定していました。「伝承者」と呼ばれるような人はこういう人とイメージされるかもしれませんが、本当はその経験も人によってさまざまです。②の人は、血縁や文化的経験はありますが、外見上「アイヌ的でない」とされてしまいます。③の人は、外見は「アイヌ的」だとされますが、文化的な体験を持たない人です。④は血縁はあっても、そのほかでは和人に見られやすい人です。おそらく今日では①や②にくらべて③や④のポジションの人が圧倒的に多いのではないかと考えられます。文化的経験は、アイデンティティを作る1つの要素ではありますが、なければならな

い、というものではありません。現代は「文化を保持している者がアイヌ」というノリがやや暴走していて③や④の人が変に肩身のせまい思いをすることがあります。文化を維持したいというニーズを尊重することと、押し付けとを分けることが大切です。

アイデンティティは何かのきっかけで新しく生まれたり、変化したりもします。

⑤⑥の人は、もともとはアイヌ文化が好きの人、⑦の人はたまたま似ているだけの人です。しかし、実は血縁があることが後からわかると、②や③、①のポジションに移行します。この3つの輪にまったく入らない人でも、後から血縁がわかって④の位置に移行することがあります。養子や婚姻によって④の位置に近くなることもあります。こうした背景は、聞いてみるまでわかりません。



- ① 一般にイメージされるアイヌ
- ② 血縁・文化的経験はあるが、外見でアイヌと見られない
- ③ 血縁・外見でアイヌと見られるが文化的経験はない
- ④ 血縁があるがその他の要素は少ない
- ⑤ 文化的経験はある(例: アイヌ文化を愛好する者)
- ⑥ 文化的経験があり、外見でもアイヌと見られるが血縁がない
(例: アイヌ文化を愛好し、容姿もアイヌ的だと見られる者)
- ⑦ たまたま外見がアイヌに近い

イラスト13. 血縁・体質・文化とポジション

【「ラム⑦」「混血」「ハーフ」「ミックスルーツ」

今の日本では、他の民族との間に生まれた人を「混血」や「ハーフ」と呼ぶことがあります。アイヌ民族の場合は「アイヌの末裔」と紹介されたりすることもあります。細かいことですが、ハーフとか末裔と言われると「本物ではない」と言われているように感じて、あまり良い気はしません。北原という人に対して「北原家の末裔」とか「北原と小田のハーフ」と言ったらおかしいですね。北原さんは北原さんであって、部分的に北原さんなわけではありません。

「混血」は「純血」を前提とした考え方です。ただ、和人もアイヌも、たくさんの人の集団が時間をかけて移り住むことででき上ってきたグループで「北原家」と同じように、そのメンバーが完全に同じ性質を持っているわけではありません。ですから「純血の北原」がないように「純血の〇〇人」はそもそもいません。ただ、言

葉や習慣などによって「あっちの人はこっちの人とは違うな」と感じるうちに「あっち」と「こっち」の内部にある個性・バラつきは小さなことのように感じることがあります。「純血」とはそうした思いこみの産物であり、これにこだわるのは「純血民族症候群」の症状です。

「混血」や「ハーフ」は近年のグローバル化によって生まれたように思いますが、人間の集団はこうした接触をくりかえしてきたのですから、昔から全人類が「ミックスルーツ」です。そのなかで、どの先祖を意識するかは文化ごとに決まっている場合もありますし、何かの理由で個人的に意識することもあります。あるルーツだけが分かっていて、他はわからないということもあります。「私は和人だ」とか「私は北原だ」という言葉は、自分にまつわるルーツから、それを選び取っているとか、このルーツがわかっているということの表明なのです。世間が混血、ハーフと呼んで

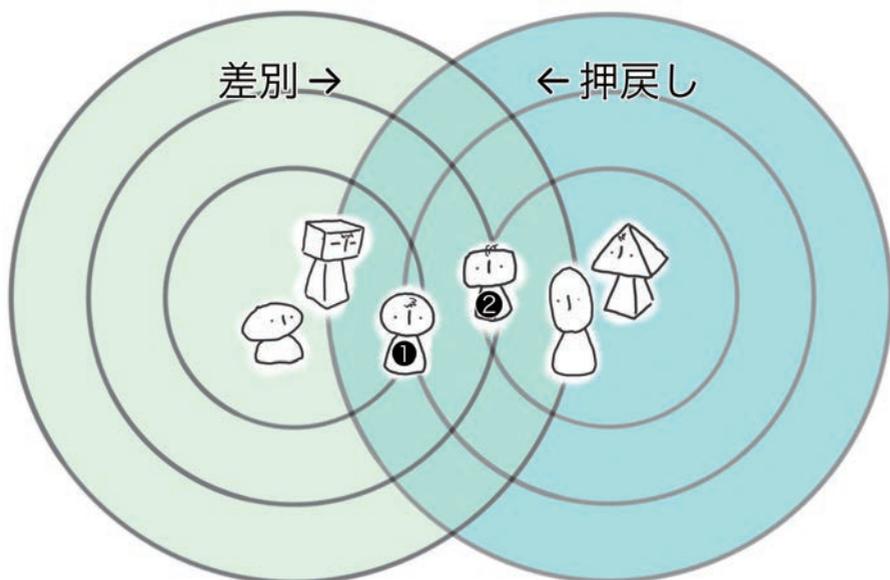
いることより、本人が何を大切にしているかを尊重するべきです。

被差別リスク・押戻しリスク

アイヌ民族の「体質」や「(在来)文化」、「血縁」などの属性は、それがあること
で日本社会では特殊に見られ、差別を受けるリスクが高まります。ただ、アイヌ民族
であれば必ずこれらの属性がそなわっているわけではありませんし、リスクの高さ
にも個人差があります。たとえば顔立ちが違っても「AかBか」のように分
かれるわけではなく、A(たとえば「薄い」顔)として思い浮かべる顔、B(たと
えば「濃い」顔)として思い浮かべる顔の中間に、色々な顔立ちがあります。Aに
近い顔が多い地域では、Bに近いほど被差別リスクが高まります。

アイヌの場合で言えば、顔立ちが、和人と違うと言われる人は被差別リスクにし

ばられることになります。いっぽう、それほど変わらないと言われる人は、体質による被差別リスクから自由ですし、被差別リスクを実感できないこともあります。同じアイヌ民族でも、血縁はあるが、体質や文化体験などを持たない人と、血縁でも体質でも周囲からアイヌと特定される人、文化の維持や復興に参加している人では、まったく異なる体験をすることになります。ですから、被差別リスクが低い人にとっては差別のリアリティが感じられず、差別があることやその辛さを軽く感じてしまうこともあります。また、高いリスクを負っている人は、リスクがそれほど高くない人と「同じ立場」とされることに納得がいかないこともあります。例えば「最近アイヌの先祖がいることを知ったけれど、体質による被差別リスクがほとんどない」という人は、他のアイヌのつながりの中に入って行こうとしても「あなたはちがうんじゃないの」と押し戻されてしまう場合があります（そうならないこともあります）。



- ① 多数者に近い・少数者から遠い→被差別リスク低・押戻しリスク高
- ② 少数者に近い・多数者から遠い→被差別リスク高・押戻しリスク低

イラスト14. 被差別リスク・押戻しリスク

そこで、こうした人には「押戻しリスク」があると考えてみましょう（イラスト14）。もともと、被差別リスクが低いように見えても、それは高い人と比べてそう見えるだけなので、実際には被差別リスクも持っていることが多いのです。

子供のころから高い被差別リスクに悩まされてきた人も、被差別リスクが低い人も、どちらも自分の

生い立ちを選ぶことはできませんから、生まれを理由に否定されることはあつてはいけません。ただ、相手の被差別リスク／押戻しリスクは、目に見えるものではないし自分ではリアリティを感じにくい、と知っておくことは大切でしょう。自分にはわからなくとも、相手にとってはけっして軽い問題ではないことがよくあります。

体質による被差別リスクは、和人や他の民族にもあります。ただ、和人の場合はそういう個性を持った個人と見られるのに対し、マイノリティは「あの人達」と集団としてくくられ排除されてしまうことがあります。体質をめぐる周囲とのやりとりは、男性と女性では、かたや「男性らしい」かたや「女性なのに」というように、アイヌどうしても違う形で体験する可能性があります。男性の被差別体験が軽いというわけではなく、女性の場合は「女性らしさ」に欠けるとか「容姿を整えるのはマナーだ」など男性にはない被差別リスクがあるということです。

このようにマイノリティとしての属性は、いくつかが結びついて、見下しや拒絶などのリスクが強まることがあります。民族性、あるいは体質をきっかけに、もう一方の属性を指摘されるリスク、差別が次世代に受けつがれてしまうリスクもあります。こう考えると、和人とアイヌの経験は部分的には重なっても完全に同じではありません。励ましやなぐさめの意味で「私もそうだよ（だから気にしなくてよい）」と声をかける場面がありますが、相手にとっては経験を軽く扱われたと感じるかもしれません。あくまで違いがあることをふまえながら協力しあうのであれば、それは力になります。

家族・地域のつながり

アイヌ民族の昔話には、血筋としてはアイヌ民族ではないものの、養子や結婚によってアイヌ社会の一員となった人や、反対に和人の養子になって和人としてくらしただ人の話があります。ウタリというアイヌ語は、今は「同族（＝アイヌ民族）」という意味で使われていますが、もともとは親類や身内を指すと言われます。和人による記録では、ウタリが使用人や居候などの意味にも使われています（ウタレと書きます）。

養子や結婚は、相手との強い結びつきを作りますし、運命も共有することになります。その中には被差別リスクも含まれます。結婚によってパートナーが被差別リスクを負うばかりでなく、和人側のパートナーが連れていた子供も被差別リスクを負うことがあります。また、和人が仕事の上でアイヌ文化研究や普及に関わるとき、

その子どもが、アイヌと同一視されて差別を受けることもあります。このとき「アイヌのように低く見られたくない」という反応をすると、差別に荷担してしまうことになります。差別がなくなならない理由の1つは、自分の身を護るために差別の共犯者になってしまう人がいるからです。

そうではなく、アイヌ民族の被差別リスクを自分のこととして引き受ける人がいたとしたらどうでしょうか。家族となったパートナーはもちろん、仕事などのつきあいから差別リスクを共有したとき、一緒に立ち向かえる人は、差別をなくするための協力者です。こうした人も、広い意味でウタリと呼ぶことがあります。アライに近い意味とも言えるでしょう。

DNAでアイヌか和人かわかる？

「DNAによってアイヌであると確かめられた」。成長してからアイヌであると知ったという人の中に、このように言う人がいます。特に欧米圏では、DNAの検査を請け負うビジネスが盛んで、その中にルーツの可能性・割合を算出するサービスもあるようです。

DNAを使って判定することができるのは、その人のルーツに、どういう地域の人が含まれるか、ということなのです。人間は移動しながら、ほかの集団との間で婚姻をくりかえしてきたので、今くらしている国とはまったく異なる地域、それも複数の地域の人が先祖にいたことがわかることもあります。それに対して、民族意識というのは、「江戸っ子」や関西人と関東人のように、DNAとは違った次元で人々が感じているつながりです。江戸っ子や、関西人と関東人は、和人の中の他の集団とDN

Aの多くを共有していると考えられますが、それと本人の意識は別です。例えば秋田県のある人が、DNAの共通性によって急に江戸っ子に入る／入れられるということはありません。

日本から海外に移住した人の中には、どこかでアイヌのルーツとつながっている人がいるかもしれません。その場合も、日本社会でアイヌ民族としてくらすリスクなど、色々な経験が急に共有されるわけではありませんから、そのことを踏まえておく方が良いでしょう。

また、いわゆるハイトスピーチの一部に、アイヌであると名乗っている人への攻撃として「DNAを調べて証拠を見せろ」と迫るものがあります。これもDNAを巡る誤解や、曲解から生じている問題です。

アイヌになれる？

アイヌとはもともと人間という意味です。そこで、アイヌ民族の中には「和人も何もない、誰でも人間、つまりアイヌだ」という人もいます。おそらく博愛的な気持ちから、または民族の区分をすることが差別になるという思いもあって、こうした言葉が出るのだと思います。和人の中にも、しばしば先住民になり切ってしまいたい志向を持つ人がいて、先住民からその言語で名前をもらった等々と、受け入れられたことを強調する場面があります。

女性と男性、関西人と関東人のように、現実には社会に複数の立場があることは事実で、それぞれ異なったニーズを持っています。和人は子供に日本語を教えたいと思ひ、アイヌはアイヌ語を教えたいと思う人が多いでしょう。そうした違いがあること自体は差別ではなく、悪くとらえる必要はありません。むしろ、女性も男性も

ない、アイヌも和人もないと言ってしまつと、そこにあるニーズの違いがあいまいになり、結果的に優位な立場のニーズだけが満たされてしまうことになります。アイヌがいかに博愛的に和人を受け入れたとしても、アイヌのニーズが放置されている社会が変わるとは期待できません。「アイヌに受け入れられた」と語る人々が、アイヌの被差別リスクなどに目を向け、それを解消するために行動するのであれば良い影響もあるかもしれません。しかし、そうでなければ、違いを認め、尊重してほしいというときに「みんなアイヌ」という言い方は混乱を招きます。それどころか、ヘイトスピーチに利用されることもあります。

先に見たように、民族の区分は主観的な(本人の感覚による)ものが大きく、その立場にいる人にとっては分かり切った事でも、他の人から見るとすぐに納得するような説明ができるとは限りません。そもそもそんなに厳密に考えられてはいないので

す。そのためか「誰でもアイヌになれる」、「アイヌに認められればアイヌだ」という物言いがされることがあります。本物のアイヌはもう滅びたかほとんど残っておらず、今のアイヌの活動はなりすましのニセモノに牛耳られている、などといわれることもあります。

行政等が実施する格差是正政策の対象になることと、アイヌと自認すること、アイヌとして発言することは同じではありません。諸制度を利用する資格は、制度ごとに決まります。内心で自分をアイヌだと思うことは自由です。アイヌとして、他のアイヌや社会にも影響する発信をする時には、その人がなぜアイヌと言えるのか、どこまで代表的な意見かが問われます。

パートナーや養子の例があるように、血縁がなくともアイヌ社会に受け入れられ

るケースはあります。ヘイト的な発言をする人でも、何らかの方法で結婚や養子縁組をすれば、アイヌとまるで無縁ということではなくなるでしょう。ただ、アイヌの経験も様々ですから、あるアイヌが「差別の被害は軽く、解消の取組みは必要ない」と言っても、それがアイヌを代表する意見とはなりません。同じように、アイヌの家族となった、被差別経験のない、あるいはアイヌに強い偏見を持つ人の意見が、説得力を持つかは疑問です。

縄文までヤコかのぼれば同じ？

アイヌ民族には、縄文時代の人間集団の遺伝子が多く受け継がれているという研究があります。そうした遺伝子は和人にも受け継がれています。そこからロマンを感じたり、博愛的な精神を語ったりする人がいます。あるアイヌの女性は、本州から

きた観光客に「自分も縄文系なので、あなたと同じです」と言われて返す言葉が見つからなかったとか。

つつこみどころはいくつかあります。「縄文文化」という言葉は、今の日本の領土にちょうど重なるように広まっていたとイメージされています。実際には、その外側にも類似の文化が広まっていますが、そこを視野の外におくことで「1つの日本」というイメージを強めてしまっています（ブックガイド⑮）。また、本州の縄文文化にも、地域によつて大きな差異があつたことが以前から知られています。「縄文」という言葉でくくってしまうことで、1つの集団・文化があつたように想像してしまいます。いってみれば「信じたいように信じている」ということで、それは自由ですが、他者を巻き込むのはいかがでしょうか。

「アイヌ＝自然人」といったあこがれを持つ人もいるのですが、それは、現代

にいたる過去数千年のアイヌの歩みを無かったことにしています。好意的であったとしても、特定のイメージ・役割を押し付けることは慎むべきです。

また、これは同祖論（先祖は同じなのだから我々は同じだという考え）の1つにもなり、ジエンダー格差や所得格差を無視して「同じ立場でつながろう」という意見にも通じるものがあります。こうした意見は、必ず優位な方から発せられるところがポイントです。「同じだ」という主張は、現実にある立場、ニーズの違いや格差から目を逸らしてしまいます。

先祖が同じだから1つになろうというのであれば、自分が相手に合わせても良いはずですが。しかし、和人が琉球（沖縄）、朝鮮、そしてアイヌについて同祖論を展開したときも、相手に合わせるという選択は1度もされませんでした。アイヌに向かって「私も縄文」という人も、自分の今の立場や、生活、権利を捨ててアイヌと同じ

になろうとは考えていないでしょう。その人の意図がどうあれ、こうした発言の効果としては、アイヌが和人に歩み寄っている現状を「これでいい」と容認することになりかねません。「あなたと私は同じ」という表明は、相手を見ずに感じる幻の共感で、愛にあふれた響きとは裏腹に、劣位に置かれた者の困難や申立てを無効にしてしまうものです。

第3章 あなたを縛るポニタク（呪いの言葉）

—ポニタクとは、相手を不幸にするための呪いの言葉です。かけられた人には恐ろしい災難がふりかかりますが、呪った人も必ず不幸になると言われています。

現代にも、言っ方も言われる方も不幸にする、形を変えたポニタクのような言葉があります。それにかれると傷つく、モヤっとする、勇気をふりしぼったカミングアウトや抗議を、無意味なものにしたり抑え込んだりする。そんな言葉にでくわすと、驚いてしまって言葉に詰まることもあります。ひどいと思ったときには対話を打ち切っても良いでしょう。しかし、言葉の意味や意図がわからないと、ひどいかどうかもわからず、ずっと後を引くこともあります。

これは、そうした言葉の意図や効果を考え、呪いを解く方法を考えるための事例集です。短い説明と、前章までの関連ページを示していますので、必要に応じて読んでください。—

「あなたは本当のアイヌではない」（P78～P92）

いわゆる「伝統文化」の知識や体験がない、差別を受けた体験がない、あるいは両親や先祖にアイヌではない人がいる、などなど、、、色々な場面で、和人からもアイヌからも発せられます。

「本物のアイヌではない」といっても「本物」の判断基準はありません。文化や差別の体験は地域や人によって内容も、その意味も変わってきます。すべてを経験し、知っている人など誰もいません。血縁についても、そもそも「純血」は新しく流行った考えで、根拠はありません。だとすると、このセリフは言っているその人にも当てはまってしまいます。

また、このセリフによって言われた人の「何か」が変わるわけではありません。その人にアイヌとしての感覚を持たせているものは消えも減りもしません。そのこと

は言う方もよくわかっているでしょう。

では何の目的や効果があるのでしょうか。単に侮辱したいのか、それとも相手が委縮することを期待しているのかも知れません。アイヌが表に出て声を上げることが望まない、社会に波風を立てて欲しくないということでしょうか。マウント取りや自分の発言力を強める意図かも知れません。その結果、アイヌとして表に出る人が減り、ますますマイノリティになります。アイヌやウタリはこうした言葉に対抗し、自らも発しないようにするべきです。

「今はもう差別はなくなった」(P54、P59、P63)

和人とアイヌのそれぞれから発せられる場合があります。和人の場合は保身のための言葉かもしれません。アイヌの場合、このように言う人は、問題を感じていない

か、波風を立てるな、という社会からのプレッシャーを受けているのかもしれない。いずれにせよ、この言葉によって、他の人が差別を感じているとしても、それ以上考えたり話したりすることができなくなります。

差別と聞いて思い浮かべるのは、一面と向かって暴言を浴びせたり、身体的な暴力を振るったりするなどの極端な例でしょう。多くの場合「差別はない／しない」という意見は、アイヌが「どこかにいても構わない」という意味で発せられ、リアリティを欠いています。ですから、就職や恋愛、結婚などで深く関わる可能性が高まったとき、アイヌと向きあう準備ができておらず、拒絶が起きやすいでしょう。また、侮蔑的なジョークやよそよそしいふるまいによって日常的に見下し・嫌悪を伝え居心地を悪くさせることもあります。例えば目を合わせない、近くに行くことを避ける、話をしない、不自然に親切に振舞う、といった態度です。これらにどの程度の影響を

受けるかは、受ける人の年齢、性別、体格、社会的な立場や環境によって大きく変わります。大柄で資産があり、何かの団体の代表である男性と、ごく普通の女性とでは、差別的な体験の頻度も影響も全く違うでしょう。すべての人の立場・経験を代表することは不可能ですから、ある人が「差別はない」というのは、その人の個人的な思いにすぎません。また、他者の経験を否定する前に、相手の経験・声に耳を傾けることが大切ですし、相手を十分尊重する姿勢を持たなければ、経験を聞くことすら難しいでしょう。

こうした個人の間での差別に加え、社会の仕組みに埋め込まれた差別や和人中心主義などは、それが当たり前になってしまっていて、それを感じ取ることも、不平等だと気づくことも難しい場合があります（イラスト4、6）。

「あの人はいい人だから差別をしない」（P51、P58）

「差別は悪いこと」だから「悪い人が差別をする」という思い込みが感じられる言葉です。自分を悪人だと思ってくらしている人は少ないでしょうし、差別に加担していると言われれば、悪者扱いされた気がして否定したくなるでしょう。

実際には、差別の元となる偏見は誰の心にもあります。人は、社会の価値観を良いものも悪いものも吸収しながら育ちます。それを意識して避けることはたいへん難しいことですし、偏見を「事実」だと思ってしまうえば、それを口にすることに罪悪感も起きないでしょう。そうして知らずに身につけた偏見が、思いがけず相手を傷つけることもあります。差別は悪人がすることだという思い込みは、差別について考えたり話したりすることをできなくしてしまいます。

「自分は差別をしない／この組織に差別はない」

一見、正しいことのようにですが、この言葉は差別について考え、話すことを打ち切ってしまうかもしれません。ここにあるメッセージは「差別をしないから私は関係ない」とも受け取れ、必ずしも「私も差別に抗する」ではありません。それでは、現状を放置することになります。差別をしないのではなく、差別を許さないというのであれば、大きな意味があります。行動する意思が示されているからです。

また、自分は差別をしていないといっても他の人との関係を、自分の主観で語ることには意味がありません。差別は意識的に行われるものとは限りませんし、自分は正当な発言だと思っていることも、立場が変われば不当に感じることもあります。相手と良い関係が築けていると思っても、相手から見ればハラスメントが起きていくかもしれません。組織の場合も、高い立場にいる者が「差別はない」と発言するこ

とは、差別を受けている人の声を封じるNGコメントです。

「自分は本州出身だ」（P154）

だから差別とは無縁だ、という意味で使われます。アイヌがくらしているのは北海道である、差別は個人の間で意識的に行われる行為であるという前提が感じられます。

アメリカでは、人種差別は南部の偏見に満ちた者が行うことだという強い先入観があるといえます。すると、北部の教養と人権意識を身につけた者は差別とは無関係だということになります。これと同じように、経済的に苦しく、地元を離れて北海道へ入植していった和人への、和人同士の偏見があるのかもしれませんが、しかし、北海道や沖縄、朝鮮、台湾等を植民地状態に置く政策を決定したのも、その「恩恵」を

受け取ったのも「内地／本土」の人びとです。そうした歴史を、済んだこと・無かったことのように忘れ、不都合な部分は現地の和人の責任とすることはできません。もちろん、現代の人々の多くは占領に直接関与したわけではありませんが、支配や占領から利益を得て作られた社会にくらしていること、支配が今日も続いていることを考えれば無関係ではありません。和人を中心・標準とする考え方を身につけていれば、他の民族を抑圧することにも、否応なく関わってしまいます。「本州出身だから関係ない」と、自分を切り離すことは、そうした責任から目を背けることです。マジヨリティもマイノリティも、たとえ不本意だとしても、自分の立場から離れることはできません。可能なことは、社会の仕組みを変えるために働きかけることです。そのために、占領を正当化するような歴史を許容／支持したり無関心でいたりすることをやめ、支配を受けた人々の傷や権利の回復のために行動する必要があります。

「昔の人間がしたこと責任を取らされるのか」（P9、P10、P47）

差別は過去のもの、終わったことで、自分はその後に生まれたのだから無関係だ
という意味です。もちろん、現代の人々の多くは、明治時代から戦前に行われた占領
に直接関与したわけではありません。しかし、今の日本国が形作られる時期に、支配
や占領から多くの利益を得たことは事実であり、またアイヌや沖縄に対する支配は
今日も続いています。その日本社会にくらしている人は、新しく移住してきた人を除け
ば、何らかの形で当事者です。また、少数者を名指しして攻撃することばかりが問題な
のではなく、和人を標準として多様性を認めない社会のあり方も、間接的に少数者の尊
厳を削っていきます。1つ前の項も参照してください。

「私にはアイヌの友人がいる」

だから差別者ではない、という意味。この言葉は、多くの場合、差別についてそれ以上話すことを打ち切ってしまう効果を生みます。さらに、そこから飛躍して「和人はアイヌと友人になれるのだから差別はない」という話につながることもあります。差別やハラスメントは同僚や友人、家族の間でも起きます。女性と同じ職場で働いている男性が「私は同僚女性の理解者で、何の抑圧もしていない」と言ったとき、それをどれくらい真に受けるかは聞き手の立場で変わるでしょう。これが真実だとすれば、セクハラもDVもこの世にないことになります。

「自分もアイヌなら良かった」

この言葉は、誰がどこで言うかによって共感できることもあれば、非常に暴力的な

意味にもなりません。

文化復興に関わるアイヌは、言葉や慣習、それも地元のものに強い愛着を持っています。そして、できるなら同じ地域の人、家族に受けついでもらいたいと望んでいます。同じ文化でも、受け継ぎ手が多くいて、継承になんの不安もなければ意識も変わるでしょう。しかし、現実には、機会や時間、場所などの確保や差別の問題もあり、地域や家族内の継承は容易ではありません。それだけに「継いでほしい」という願いも強くなります。

そうした思いに和人の学習者が接すると、事情を理解する一方で「自分は受け継ぐよう期待されている者ではない」と感じます。このとき、双方がいだく思いは自然なものですし、和人学習者が「もし自分がアイヌだったら、望まれて学ぶことができたら」と感じることは十分理解できます。

同じ言葉でも、和人とアイヌの意見が対立した場合に、捨て台詞のように「自分もアイヌだったら良かった」と言ったらどうでしょう。ここでは、当事者として発言権を得て、相手を黙らせたい、という意味になります。アイヌに「言いたいことを言う特権」があると暗に言っていて「和人こそ差別されている」という意見にも通じます。アイヌが負っている被差別リスクなどへの理解が欠けた発言です。現実のアイヌは、差別の苦しみのあまり「アイヌじゃなければ」と口にしてしまうことがあり、そうした言葉を耳にすることも辛い体験です。仮にアイヌとしての生活体験があれば、このような言葉が本当に出てくるものかも疑問です。おそらく「差別には負けなければ良い」という感覚も混じっているのでしょう。つまり、個人主義（集団に属することによるしがらみ・影響など自分には関係ないという考え方）でもあり、差別に負けるものが弱い、悪いと考えていることの表れでもあります。

「アイヌがこれだいいいってさ」

アイヌに対する無理解や配慮を欠いた発言に抗議すると「他のアイヌがこれだいいと言った」という反論がかえってくる場合があります。言い換えれば「他の者が良いいと言っているのだから、お前も良いいと言え」という意味になります。「あるアイヌが差別はないと言った」というのも同種の発言です。

それは、その「一人のアイヌ」が良いと言ったにすぎません。アイヌを代表する立場はありません。仮に、何十人、何百人の人が良いと言っても、別な人にとって不快なこともかもしれませんから、そのとき目の前にいる人と「これで良いか」を話し合うべきでしょう。

なお、社会的な地位が高い人や裕福な人、著名ななどは、差別によるリスクが低下します。そのような人が「気にならない」と言ったとしても、他の人が同意するでしょうか。

「違いを強調するから差別が起きる」



イラスト15. 頭の中のイメージで見え方も変わる

違いがあるから差別が起きる、という考え方をすれば、これは正しいように思えます。しかし、違いがあれば必ず差別が起こるわけではありません。その違いに「良し悪し」の価値づけがされることで、嫌悪や恐れ、見下しが起こります。例えば、「黒猫は不吉」という考え方があります。しかし、明治時代までの和人は黒猫を縁起の良いものとしていました。猫は猫であって、そこから

吉凶を感じ取るのは人間です。

個々の人の多様性と、それに勝手な価値づけをして差別をする心理のどちらを改善すべきかといえ、言うまでもなく心理の方です。違いを強調するなどという意見は「黒猫が生まれても黒いと言わなければ解決」と言っているようなものです。

「差別をされる方にも原因がある」(P33)

被害者を攻撃する言葉としてよく耳にします。差別ではなく「正しい批判・注意」だということです。外見、性格、習慣は、人に迷惑をかけない限りその人の自由で、それが気に入らない等々は身勝手に一方的な言い分です。嫌悪したり下に見たりする他者への価値づけは、他者に要因があるのではなく、加害者が頭の中で行っているのです。差別者は「正しい」かどうかでなく、自分に危険が及ばないことを基準に

差別行動をします。前の項も参照してください。またマイノリティを否定的に評価する背景には、生産性のみを追求する社会の価値観が関与していることもあります。

「寝た子を起こすな」

差別があることではなく、差別があると言う事を問題視する意見です。これでいい、めんどろだから黙っていろということですよ。

民族性が目立たない環境では、差別が表面化しにくくなることがあります。「こ」で民族性を主張すると「わざわざ差別を引き起こすな」という批判が向けられることがあります。しかし、大なり小なり違いはあり、それを押し殺すことで差別をやり過ごしているものです。平静に見えるふだんのくらしは、無理を重ねて成り立っているとても苦しいものなのです。人々の違いを認めず、差別の恐怖によって黙らせ

ていることこそ問題視されるべきです。和人がこの言葉を発するとき、問題をアイ
又に押し付けて差別解消の労力を避け、抑圧を維持する効果が生まれます。

「アイ又だけでなくみんなに配慮が必要だろう」（P31、P47～P50）

この言葉の背景には、困難を抱えているのはみな同じだ、という主張があります。その
意味で「ブラック・ライヴズ・マター（黒人の命は大切だ）」の主張に対抗してとなえられ
る「オール・ライヴズ・マター（全ての人の命がたいせつだ）」と似た言葉です。イラスト
4、6に見るように「みんな同じ」ではありません。また、先住民族の立場を考えれば、
やはり適切な意見ではありません。

「困ること、壁に当たることは誰にもある」のはその通りだとしても、マジョリティと
マイノリティの経験は同じではありません。マジョリティは個人として振舞うことができ

ますが、マイノリティは属性で一括りにされ、不利益を受けることがあります。困難を抱える属性が複数あるとしても、それらのケースは個々の事情がありますから、個別に検討することが必要です。アイヌ民族についての話をしている場に、あえて他の話題を持ち込むと議論を拡散させてしまうことになります。

そして、先住民族は、基本的な様々な自由を制限されています。例えば、和人の中のマイノリティの経験は、自分の民族的アイデンティティや言葉・文化を維持しながら社会参加ができる点で、その人と同じマイノリティ属性を持ち、アイヌでもある人の経験とは異なります。(イラスト6) 先住民族と他のマイノリティへの取り組みをそれぞれ行うことで、どちらの困難も解消していくことができます。

第4章 さまざまな人の経験を知る—対談集

—前の章までの一般化した説明は、実際の経験を持たない人にはとらえにくいかもしれません。ここでは、

実体験から生まれるリアルな感覚を知る助けとして、4つの立場（成人後にアイヌと知った、和人として文化活動に参画、アイヌрутツかもしれないが未確認、アイヌと知って成長した）からの語りを紹介します。—

1 A氏 アイヌрутツ

モ：本州で育ったということですが、アイヌとしての経験などはありましたか。

「私自身がрутツを親から知らされていませんでしたし、当然友達も知りませんでしたので、アイヌとしての経験は何もありませんでした。ただ、アイヌとしての身体的特徴に挙げられがちな目鼻立ちがハッキリしている事については、出目金というあだ名とか、毛深い事に関して雪男と呼ばれたりしましたが、和人同士ののからかいや

イジメと同列に捉えていました」

モ：ルーツについてはどのように知りましたか。

「自分や親類の出身地や顔立ちから、そうなのではないかなと思っていました。成人前に、アイヌではない方の親からそうかもしれないと聞きました。ただ、アイヌの親にはなかなか聞けなかったし、親戚の間でも話題にできる雰囲気ではなくて、そのまま最近まで確かめられずにいました。最近ようやく戸籍などを取り寄せる余裕ができて、先祖の名などを確かめることができました」

モ：ご自身のルーツについて、周囲に話すことはありませんか。

「自ら積極的に触れ回ることはありません。ものづくりが好きなので、まだアイヌである確信が持てない頃からアイヌのデザインを取り入れた作品を作ってきました。その製作活動の中で、匿名ですがルーツをSNSで公開したり、販売することがあ

ります。自分のプロフィールには、まだ確信ももてていなかったので、ぼんやりとアイヌであることを漂わせるくらいの書き方をしていました」

モ：それには何か反応がありましたか。

「あなたは本当のアイヌですか？という質問が数回ありました。DNA検査でルーツがアイヌであると確認した、という人からメッセージをもらった事があり、そんな確認方法もあるのか、と思ったことがありました。私はまだ検査をしていません」

モ：DNAではわからないですよ。作品作りをしていることは、知り合いには伝えてますか。

「あまり言っていないですね。職場の決まった人には言っています。SNSのアカウントを教えたりとか。大学時代の知り合いにも、SNSを始める時に少し知らせました。それで見てる人は知ってる、というくらいかな。家族は知っています。手伝って

もらったりもするので」

モ：アイヌの作品を作ることに加えて、ご自分もアイヌだということは話しますか。

「作品に関心もってくれた人とのやり取りで、質問がきたら答えている程度ですね」

モ：知人の反応はどのようなものでしたか。

「そうなんだ、顔立ハッキリしてるしね、そう言われればそうだったんだ、というくらいですね。偏見は全く感じないです。内心複雑に思っても、傷つけないための配慮で言わない、という感じでもなく。オンライン上では、プロフィールに関心をもつ人もいて『ほんとですか?』とか『自分もルーツがあるんで、そこを知りたい』と連絡してくる人もいます」

モ：そういうときはなんと答えるんですか。

「そうだと思う、という程度ですね、前は。今は確認がとれたので、そうですとはっ

きり言うこともありません。今は、聞かれたら答えると言うよりもネット上ではちょっと公表する方に傾いてきていますね」

モ…本名を名乗りたいと思うことはありませんか。

「それは微妙です。親戚への迷惑とか。身内には、アイヌのことを蒸し返して欲しくないという人がいますから。自分はいま故地を離れて差別体験も無く平穩に過ごしてるけど、地元でくらしてる人がどんな目に遭うだろうとか、私の発言が火種で何かあったときに対岸の火事のように遠くで眺めるような事態になりはしないか？などと考えてしまいます」

モ…やはり、直接影響する人のことを考えますよね。

「そうですね。自分はいまその土地にいませんので」

モ…親類の方とは、少し話題にできるようになったんですね。

「そうですね。イトコたちが、地域のちょっと年配の人に地元のアイヌのことについて聞き取りしてくれた時『あなたのところはアイヌの名家なのだから、先祖のことをちゃんと知っておきなさい』って諭されたそうです。地元では、今でも知ってる人は知ってるようです」

モ：将来的には、公表できるようにしたいですか？

「あえて出したいとも思いませんね。聞かれたら普通にいえるくらいにはなりたい。わざわざ触れ回りたいとは思いません」

モ：なるほど。名前を聞かれたら答えるのと同じように、言いたいときには隠さずに言える方がギクシャクしないですもんね。これまで、活動の中でトラブルはありましたか。

「ネットで作品を出している中では、好意を持ってコンタクト取ってくる人が多い

ので批判などはあまりないです。ただ、私自身は身内から直接受け継いだものがないから、かつての伝統のものをそのまま作ってはいけない気がして、アレンジすることが多いんです。それは著作権に配慮してのことではあるものの、似て非なるものを作っているように感じることもあり、それが気がかりですね。ニセモノだと非難されるんじゃないかとか」

モ：：どういふときに感じますか。

「伝統を継いでいる人は、そのことをアピールしているし、ニセモノ批判みたいな文を見たり、空気を感じたりして肩身が狭いことはあります。だから、他の作り手とまる被りしないように、私がおのりたちの受け継いだものを侵害してしまうことがないように、人の作品はよくチェックします。そういう作品の説明を見ると、先人から受け継いでやっていますということが書いてある。ということとは、そうじゃない人

は真似事でニセモノなのかと考えてしまつとかですね」

モ…今の作家も、家族のものを受け継いで作っているという人は珍しいんじゃないですかね。それに、昔の人も必ず家族から学ぶという事でもなくて、上手な人にデザインをしてもらつこともあるので、デザインは別に一子相伝ではないようです。良いものは人がまねしていく。かつて家族から教わったのは、それがいちばん簡単だったからであつて、そうでなくてはならないということではないし、今の文化の継承・存続にも、近所の人から教わることもあれば、講習会のようなところで学ぶとか、本や写真から学ぶ、博物館の物を見る、など色々なルートがあつて良いと思つたんです。

「そういえば、SNSで強い攻撃調のコメントが一度ありました。その人もアイヌじゃないようだったけど。「こいつはアイヌじゃないのに、ふざけんな」というよう

な。私自身も、そのときは「たぶんアイヌ」という段階だったので、反論のしようもないし、こわかったので放置しました。語調が強くて、こんなこと書く人がいるんだと驚きましたね。たしかに自分の作品もニセモノくさいだろうとか、本来自分はアイヌと言える立場でもないかもしれないと思っていました。和人の教育しか受けていないし、何にもアイヌのこと知らないし、アイヌについて聞かれたってなにも答えられないしなあーと。その時はへこみました」

モ：それはひどいですね。実際に文化盗用も多いので、批判をする人の気持ちもわかりますが、ネットでは相手が本当は何者かなんてわからないので、丁寧にやり取りしないといけませんよね。丁寧に確認したって本当のところはわからないという前提で、慎重に発言しないと。

「ここに至るまでの過程に時間はかかったものの、『私はアイヌです』と、開き直り

自覚できるようになって、今となっては、『私は同化され日本人として生きてしまっている』と、アイヌと名乗れるような存在ではない』と、心の中で密かに否定していたよりも、心地よく安堵感と共に過ごせるようになりました。これは、私がダイレクトに被差別体験をしていないからというのもありますが、私にとって大きな事実です。

日本社会にアイヌの為の公教育やシステムが整っていない事や、私達一族にアイヌである事の伝達がなくなっていたことなどは、アイヌの先祖だけの責任でも私個人が気負わなければならぬ事でもないこと。恥ずかしい事でも、引け目を感じなければならぬような事でもない、というところに、やっと到達しました」

2 B氏 アイヌルーツ(?)

モ：今の活動には、どういう方が参加していますか。

「アイヌも和人もどちらもありますね」

モ：アイヌに関心を持ったきっかけは？

「自分自身がそうかもしれない、ということがきっかけでした。それで、小学校時代からときどき意識していました。家族が、上の世代から『先祖にアイヌがいたかもしれない』と聞いていたらしくて。ただ親戚に聞こうとすると、その話題自体にすごく抵抗があるようで、詳しく聞くことはできませんでした」

モ：そのことは周囲に話しますか？

『私もそうかも知れない』と話すこともあります。今のアイヌの活動は、アイヌではない人たちが着物を着て再現していると思うているらしくて『まだいるんだ』と驚

く人もいます。北海道外の人にそういう反応が多いですね」

モ…縄文のことが話題になることはありませんか？

『(縄文の伝統を)受け継いでるんじゃないっ?』と聞かれることはあります。聞く方は期待しないものを持っていて。そう聞かれても、「こちらには的確な答えがなく、どうなんですかねくらいのことしか言えません。ただ、縄文と絡めてくる人は偏見みたいな期待も感じます。アイヌに関心を持つ人の無邪気な無意識のひとことに、引っ掛かることがあります。他と同じような暮らしをしているのを知った人が『アイヌも進歩してるんだね』』とっているのを聞いたときだとか。すごく思うのは、私が引っ掛かる以上に、アイヌとしてのアイデンティティを強く持っている人は、どう感じるんだろうと。傷ついて欲しくないなと思います」

モ…なるほど。自分のルーツを確かめたり、どこでも話せるようになりたいですか

「今は調べなくていいやと思っています」

モ：なしてですか

「アイヌの知り合いの話題に入っていたら『何言ってるの、あなた（和人だから）関係ないよ』と言われたことがあって。それはそうかもしれないですけど引っかけじゃないですか。アイヌとしてそこに関わりたかったわけじゃなくて、どういことをしてるのか知りたかっただけなんですけど。アイヌが抑圧されたり排除されてきたことを考えれば、そういう言い方になる理由もあるんだろうと思いますけど、私も『アイヌじゃない』とも言ったことがないので、こっちの見た目だけでアイヌじゃないと決めつけられるのもおかしいと思うんです。誰だってアイヌである可能性も否定できないじゃないですか」

モ：そうですね。

「そういうこともあって、改めて気にはなったんですけど、調べてはつきりさせたところでそういう人の姿勢が変わるわけじゃないし、アイヌだったら『勝った』と思うわけでもないしよ」と思わなくなっています」

モ：嫌になってしまったということですか

「嫌になったわけではないけど、もし先祖にアイヌがいて『嬉しい』とか、いなかったら『がっかり』とか自分が思うことが嫌です」

モ：なるほど。

「（今よりはつきり）なりたいわけでもないし、なりたがっていると思われたくない。そこにこだわらなくて良い状況になってほしいです」

モ：そうですね。政策レベルで色々なことを決める場では「文化を伝えることは誰がやっても良い」という感覚があると思いますが、何か感じることは。

「そうですね。やはり実際には関係ないとは言えませんよね。誰かが「和人のくせに」と言われているのを聞くと、私に言われたことでもなくとも、そう思われているのかなど気になることはあります。そのときによるけど何をするのか、活動の中で伝えたいことがハッキリ見えていたときはやりやすいですね。多様性の大切さを伝えるとか。その中でアイヌや和人としてそれぞれの立場からの伝え方、関わり方をハッキリ話し合える関係だとしてもやりやすいです」

王：…ということは、民族性の話題を避けるよりも、立場の違いをくまえてそれぞれの動き方を話せるほうがやりやすいということですか？

「そうですね。自分の生い立ちや考えを伝え合って、どうしていきたくかを話し合えるのがいちばん理想ですね。「こういうことしないと、自分の民族的な立場を考えるとどうもないですね」

モ…和人という言葉の受け止められ方はどうですか。

「聞いた話ですけど、一度それが話題になったことがあって、何かの話題に和人という言葉が出てきますよね。居合わせた人の中に、戸惑いと言うかすごくネガティブな反応をした人がいたそうです。『え？なにそれ』と、自分の側に名前があるとは思わなかった、その言い方を認めたくないということだったみたいです」

モ…なるほど。多数派の人は他から見られる経験がないし、集団ではなくて自分自身として、個人としてとらえますからね。自分は「ふつう」だから集団として名前があるとは思わないんですね。

「自分が見るだけじゃなくて見られる存在になるんだっていうのは、ビビりますよね」

3 C氏 和人ルーツ

モ：アイヌについては知っていましたか。

「もともと海外の異文化に関心があって、そのうちに歴史なども学ぶことになりました。ただ国内の先住民族であるアイヌのことを何も知らないと思って、海外より先に国内を知らなければと勉強しはじめました」

モ：地元の方や、学校時代の友人はアイヌのことを知っていましたか？

「ほとんど知りません。国外のの方が知っています」

モ：それはなぜでしょう。

「教育が圧倒的に足りていないのだと思います。教科書での取り扱いが少なすぎますし、伝統文化に偏りすぎています。特に本州では学習機会が不足しています。先住民という言葉からも『今はもういない人々』という印象を持たれているのではない

でしょうか」

モ…そうですね。和人という言葉は知っていましたか？

「知りませんでした。それまで自分のルーツを考えたことがなくて、顔も言葉も同じような人しか周りにいなかったのです。よく考えると在日外国人の同級生もいたけど、その子はその子であって、外国人として意識したことがなかったんです。先住民族のことを学び始めてから、改めてあの子は外国人だったんだと気づきました」

モ…北海道での印象はどうですか。

「北海道の人ならもっとアイヌのことを知っているかと思っていたのですが、北海道の博物館のスタッフでも、知識も関心もない人がいて、そんなもんなんだと思いました」

モ…今の活動は？

「文化的なことです。でもアイヌ民族のそばで学びたいとは思っていましたが、自分でやるつもりではありませんでした」

モ：なぜですか？

「『こういうことは歌舞伎とか日本舞踊のように、その民族に出自がある人がやることだと思っていたので。自分は担う側ではなくてお手伝いができればと思っていました」

モ：そうだったんですか。

「気づいたらやることになっていました。ただ『この部分には和人は触れられない。触れて欲しくない』と言われることもあって、ショックも受けました。もし自分がアイヌだったら、と考えてしまったこともあります。でも、そんな風に考えるのも変だと思いました。もし自分がアイヌだったら、簡単にそんなこと言えないだろうとも

思います」

モ：そういうことを相談できる人はいますか？

「いません。なぜ和人が関われないのか、今は自分なりに考えて納得していますが、誰か教えてくれる人がいたらもっと早く受け入れられたと思います」

モ：和人と呼ばれることについて抵抗のある人もいるようですが、どのように感じていますか？

「どんな呼び方をされても、差別的な意味・反感を込めて呼ばれたら辛いけど、和人という言葉は日本の多様性を説明するものだし、そう呼ばれて困ることも無いですね」

4 堺由香氏 アイヌルーツ

※この箇所はブックガイド④に掲載した対談を一部抜粋したものです。会話に出てくる「本文」も、④の論文をさします。全編は冊子またはオンラインで読むことができます。各パートの番号も掲載時のものです。

② アイヌの当事者性

さ：本文を読んで最初に気になったのは、アイヌ性という言葉を慎重に使わないと、和人が自分の内にあると空想しているアイヌ性の話に引き寄せてしまったり、妙な憧れでアイヌになりたい人に都合よく解釈されると困ると思った。

モ：確かに書いててそう思いました。本文では存在拘束性という言葉を使ったけど、自分のことをどう思うかは生まれついた環境によって、意識の土台として決まって

いるところがあって、自分の意志ではどうにもできない。アイヌでも和人でも、その生まれを自分の意志で変えて別なものになることはできない。例えば私が生まれつき大阪の人に憧れたとしても、大阪人にあこがれる埼玉人でしかなくて、大阪で生まれた人との意識の差は消えない。自分のルーツや属性を表明するかどうかはコントロールできても、意識や経験を作り変えることはできない。考えない方が良くから考えない、といっても考えてしまうとか。意志の力でできることには限界がある。だから、この文では「自分でコントロールできる」とかどうかが「重要だと考えた。親が誰かはコントロールできないし、周りからどう扱われるかもコントロールできない。」

【中略】。

さ…別に今アイヌの暮らしてないじゃない」と言う人たくさんいるよね。言っ

る人も昔ながらの日本の暮らししてないと思うけど。

モ：そうなんだよね。じゃあ、ちょんまげ結ってない人は和人としての自意識を持ってないことになってしまう。でもアイヌはやっぱり「わがまま」だって見られてるんだよね。コントロールできるものをしないのだと。

さ：うん。そうじゃないんだけどね。

モ：本文の最後の方にワナビ（ここではアイヌになりきりたがる非アイヌ）のことも書いておいたけど、自分の生まれ持ったものは自分ではどうしようもなくて、しかもマイノリティの場合は不利な立場に固定されてしまっているのに、マジョリテイはそういう風に勝手に相手の立場になり代って、自由に振舞って見せることができる。本当に自由というより、文句を言わせない力を行使している。すごく変なことをしているのに。だからワナビを見ると身勝手に感じるんでしょね。

【後段略】

③和人の当事者性

さ：「和人の当事者性」のところ、和人がいる場でこういう話をする、「突然加害者として名指された」とか「自分では差別した事がないのに」という反応があるという話、これ結構多いんじゃないか。「アイヌの差別にすごく問題を感じています」って言う人でも、アイヌと和人の関係を離れた所から見てコメントしたりとか。「あなた自身は？」と感じてしまう。

モ：そういう人多いよね。

さ：私の知人にもそういう人がいて。数年前に、SNSに何度かアイヌについて投稿していて、そういうのを見るたびに腹が立ってしょうがなかった。

【中略】

さ：その人は元々本州の人で、自分は差別の歴史とは直接関係ないと考えてたのは。私が少しきつい言い方になった時に、「そういう言い方をするとあなたの方が損をしますよ」と言われたこともあった。それは男性がフェミニストの主張じゃなくて言い方を問題にしたり、マイノリティの言うことにちゃんと向き合わない態度と同じだと指摘したら「わかりました」と返事がきたけど。

モ：ああ、言い方を考えればもっと賛同者が増えるのに、みたいな。

さ：そう。なんでこっちで考えなきゃいけないのか。そっちで考えてよ、と。こっちが怒るのはしょうがないでしょう。

モ：楽しいところはこっち（主催者）、問題はそっち（アイヌ）の管轄。

さ：だから、私が歴史の事を調べたて伝えたら「それは大事なことだから、あなたが

しっかりと取り組むと良いですよ」と言われたり。企画者はそれが仕事でやってるんだから。こっちは、仕事じゃなくても自分にとって必要なことは調べるけど、仕事として請け負ってる人は、ちゃんと歴史的な考証や配慮をしてほしいと思う。アイヌ文化アドバイザーとも関わって仕事してるんだし。

モ・アドバイザーが呼ばれる仕事というのは、企画の根幹の部分は和人が作っていて、そこに合う仕事をするように求められるわけだから、アイヌとして関わっている方も辛い所があるよね。

あと、観光の仕事してる人も「仕事だから」という言葉を割り切りや免罪符的に使ってしまうことがあるけど、仕事であれば、それが社会に与える影響は当然考えなければいけないでしょう。

嫌な体験をしたときに「これが仕事だから」と言い聞かせてスルーしてしまうと、

相手には「アイヌにひどいことしても何のおとがめもなかった」という経験として残ってしまう。それから、ちよつと話を盛って物を売ったりする人も「こっちは生活のためにやってるんだ」と開き直るようなこともあるけど、やはり他のアイヌへの影響を考えなくてよい訳ではない。

さ：やることによるマイナス面も考えて発信しなければいけないということだね。場当たりに、その場をしのぐような形ではなく。

壬：ある観光の仕事をしてるベテランの人は、とても明るくてひょうきんな人で客あしらいがうまいんです。嫌なことを言う客が来てもひょうきんに振舞ってやり過ぎす。怒ったり深刻な応対しても職場は守ってくれない、でもそういう客に長々いられても困るから、相手の言うことに乗ったり、ひょうきんに振舞って早めに帰ってもらうことが自分や同業の人を守ることになる。それは現場の対応として1つの

やり方だけど、管理職はそのままにしておいてはいけない。管理職が問題を認識しないで「これでよい」という風に振舞ってたら、それも現場の人を傷つけることになるし。

さ…仕事としてアイヌについて何かするときは、先に対策があると良いね。

【中略】

もう一つ、そのイベントにスタッフとして関わってるアイヌの人がいたんだけど、その人がイベントの公式ページで、和人から受ける偏見のことを少し書いていたんだよね。「人を型にはめるな」という書き方で。私はその人自身じゃないけど、記事が出たのは会期の終わり近くで、イベントに関わるなかでマイクロアグレッションのようなことがあって公式のブログで伝えた方が良く考えたのでは、と私は思ったんだよね。

実際のところは違うのかもかもしれないけど、当事者にそれを書かせてしまうような運営の体制にすごく問題を感じて。イベント開始前に対策をしておくべきことじゃないかと。

モ：なるほど。

さ：運営側にいる知人に言わせると「自分たちの問題じゃない」というようなスタンスなんだよね。そのアイヌの人に書いてほしいと頼んだわけじゃなくて、その人の個人的な考えで書いていることだからと。

モ：なんか答えがかみ合っていないね。

さ：そう。イベントに関わってそういう体験をしたことが問題ではないか、という話をしたんだけど。これはアイヌ側に言わせてしまうんじゃないかと、イベントを主導してる和人の方で、アイヌが関わるうえで嫌な思いをすることを先回りして対策を

しておかないといけないのでは。マイノリティの参画を得る時点で、マジョリティ側に求められる配慮じゃないかと。

モ：そこは書いたのが本人の意志かどうかとか関係ないよね。

さ：そう。でも、それが自分の問題だとは思ってないようで「自分は文化を知りたい」とか「新しい関係性」とか「ニュートラルな立場から関わる」とか言うような人で。

だからさっきの「突然加害者として名指されて不快」というのと同じような反応だったなど。そのままの言葉ではないけど、和人とアイヌの問題を自分には関係のないこととしている。「ニュートラル」は絶対言っちゃだめなやつ。

モ：ああ、新しい関係とかニュートラルは禁句ですね。「未来志向」とか。自分がたまたま生まれついた立場からは、良くも悪くも自由になれないんだけど「僕だけは

違います」って勝手に自由になっちゃいます。

「自分は差別には関わってない」とか「煩わしいことはスルーします、昔のことは言うな」というのを言い換えただけ。

さ：新しい関係性というより新しい形の搾取に感じてしまう。たしかに、もともと気付かないでイベントが始まったというのはあるだろうけど、問題が出てきた後もそういう言葉で覆い隠さないで欲しい。

モ：そういうのはアイヌが関わる文化イベントに共通していると思います。アイヌの楽しい部分だけの提供を求められるんだけど、その中でも和人のスタッフとかイベントに参加する人々と接する中で不愉快な思いをしたり、セクハラもあってすごく傷ついたりすることがあるんだけど、そこは主催者は関知しないというよつな。

さ：うん。そういう所に出ていくアイヌは、アイヌの事を知ってほしいという思いも

あるから嫌なことがあっても温和な対応するかもしれないけど、だからといって一
緒にやってる和人が、他のアイヌにもそついう対応を求めるのはおかしいと思う。
イベント時にはマイクロアグレッションが起きることを前提として、そこへの対策
を含めたイベントにしてほしい。

【後段略】

⑤ステレオタイプ

モ…さっきの話題と重なるけど、ステレオタイプについて感じていることはありま
すか。

さ…ステレオタイプな期待をかけられることからできるだけ外れたい。和人を喜ば

せるようなことはしたくない。「なんだアイヌらしいとこないんだ」とガツカリされたい。

モ：何か変な期待をされた経験が？

さ：期待というのか、昔、音楽好きな友達が、アイヌだとわかった途端に「会いたいと言ってる人がいる」と言い出したり。

モ：あー。

さ：最近はそういう人と接しないようにしてるからないけど、学生のと看仲の良かった友達がスピリチュアル系にはまって行って、それまでは趣味が合ってたんだけど、急に「アイヌって日本のネイティブだね」とか言い出して。縄文の話とかやたらにされるし。「アイヌだからこういう音楽が好きなんだね」とか。それ全然関係ないけど。アイヌだって色んな音楽好きな人いるし。

【後段略】

⑦ 体質と健康被害

【前半略】

さ…なんかアイヌらしさってよくわかんないよね。自分ではそんなに濃いと思っ
ないけど、周りからは色々いわれるし。

モ…本文の2-1にディアンジェロっていう研究者の言葉を引いたんだけど、男ばか
りのなかに女性の自分がいればジェンダーが際立つとか、ヨーロッパ系の中にアフ
リカ系やアジア系が1人だけいれば体質の差が際立つとか。同じように、堺さんは
和人の同級生からはインド人と言われたことがあるけど、アイヌと話すときは「薄
れて良いね」と言われることもあると（後述）。

あと、体質について話しておくことは。

さ：アイヌにとって毛深いというのは、ただそれだけじゃないという気がする。親戚の子で、アイヌじゃない方の親戚の子が毛深いのと、アイヌの方の子が毛深いのとでは、ちよつと感じ方がちがう。そのことで色々あるんだろうなと心配してしまう。和人でも毛深ければ色々言われるんだけど、それだけじゃないっていうことを感じちゃうよね。自分がした嫌な経験のようなことも、この子についてくる予感というのかな。自分でも中学のときに周りから言われたりしたから。アイヌの知り合いからは「あなたは大丈夫でしょ」とか言われるけど。

親戚の子は、親が「これはカッコいいんだ」と教えたりしてるけど、学校で何か言われるとどうなるか。

モ：学校で言われることの方が、世間の見方って感じがするもんね。

さ：うん、不特定多数からの見られ方だから。影響力強いよね。

モ：うちの子供も、動画サイトに出てくる脱毛の広告がひどいと言ってる。

さ：海外のアーティストで、毛の処理をしないでキレイな人がいるし、人によって「(毛があることを)それが良い」と言う人がいたとしても、マイナスの言葉の方を気にしちゃうよね。脱毛はしたい人もいるだろうから、脱毛してもしなくてもどちらでも良いといいね。

モ：タバコの広告だと、少し前から「健康を損なう可能性があります」って書くようになったでしょ。美容の広告も「あなたの自由な選択だ」と書く企業がでてきてる。

「あつたら恥ずかしいよ」とか「無いと恥ずかしいよ」というのは良くない。美しさの基準はこれだ、と強迫的に訴えかける広告はやめて「1つの美意識にとらわれるとあなたが傷つくことがあります」「くらい書くようにした方がいい。

⑨ 「純血」と二重の排除

さ…血が薄い、血統が薄いとされる者は二重に排除される。そうだね。

【中略】

モ…二枚舌ですよね。「なんぼ薄れたってアイヌはアイヌだ、顔でわかる」と言ってみせながら「純粹ではないんだからアイヌとしての主張なんて成り立たない」と。

「純血」をうまく使い分ける。【中略】

私の親も私も、仲間内からは「顔が薄い」ということでアイヌに見えないと言われて来た。学生時代にどっかの行事に出て、宴会でアイヌ語の歌を歌うと「よく知ってるシャモ（和人）だなー」と言われたり、阿寒のある男性からは「前から聞きたかったんだけど、あんたアイヌなのか？」ってストレートに聞かれたことがある。前か

ら聞きたかったという割に、その人は答えたことを覚えてなくて、違う場で合計3回も聞かれた。【中略】だけど、和人からは、和人ではない、異質な者として見られるんですよ。そういう経験や、ネガティブなことではなく、ただ自分と親や先祖との繋がりを感じて、アイヌだと思っている感覚なども「薄いのでアイヌでない」という一言で無かったことにされてしまう。だから自分で自分をアイヌだと思うことと、他の人がアイヌかどうかを判定することは分けなければいけないと思う。自分の意志が尊重されるように、相手の意志も尊重しないと。

さ…それは私も言われたことがある。20年は立たないくらい前だけど、アイヌ語の先生とか何人かで二風谷に行ったとき、私もアイヌなんですって言ったら地元的女性から「いいね」「って言われて。「シャモと血が混ざるとそういう風（薄い顔）になるんだね」って言われたことがあったんだよね。だから、薄いか、あとそのとき色

が白かったから「白い」と言われた。

モ…確かに肌の色の事も話題にでますね。

さ…うん、和人でもアイヌでも人それぞれだと思うんだけど、その人は「自分はアイヌだから黒い」と感じていたみたいで。そう言われて私は逆にびっくりした。

【中略】留学生の人から英語で話しかけられたことある。日本語で「こんにちは」って返したら「あ、間違えました」って日本語で言い直された（笑）。兄も昔仕事で新幹線に乗ってたら、車内販売の人に英語で声をかけられるとか。どっか日本人ぽくないように見えるんだろうね。

それと今思い出したけど、私も中学校ではインド人でクラスの人に呼ばれた。だから「薄くなっちゃっていいよね」と言われるけど、そんなことないか。これ（本論）に書いてある通り。「マイノリティから薄いとされても、マジョリティからはじゅう

ぶん濃い」。

モ：札幌の知り合いも、北大に入ってくるときに守衛に「外人かい？」って聞かれたことがあると話してくれた。別に嫌な言い方ではなかったようだし、悪意もないのだと思うけど言われる方は意味がわからない。守衛の人は日本人には何も言わないのに外国人だと思ったら確認するわけで、言われる方としてはチエックを受けているようなプレッシャーがある。手放して「そこに居ていい」わけではないという、承認されていない感覚になりますよね。まるで、そこにいることに許可があるかのような。アイヌであっても外国人や他のマイノリティであっても、日本の「標準」から外れると見られる人は、細かい所でいちいち居心地の悪さを感じる。

さ：前にその話を聞いて、大学に行くのに気が重くなった。自分もそういう対応されるかと心配してしまう。別な知り合いから「あなただったら、言わなきゃわかんない

んじゃない？」と言われたことがあって、それは差別されなくて済むんじゃないかという意味だったんだけど、その人は見た目ですごく苦勞してきてそう言ってしまうのかも知れないけど。隠して伏せておけば差別されないのが当たり前ではおかしい。隠すことなくいられる社会じゃないと。

モ：それは「純粋なアイヌはいない」という話にも通じますよね。いると気づかれなければ、別な立場・ニーズがあるということも認知されない。自分はここにいて、といつても「もう薄いから関係ない」と言われてしまう。

さ：また別な人だけど「この子、こんなに薄いのにアイヌの事やりたいんだって」って言われた事もある。でも「薄くて良いよね」と言ってる人も、その子供や孫がそう言われるかも知れないのに。

モ：そう言う人も、別に言うほど顔立ちがはっきりしなかったり、色々だったりする

けど。

さ：あと、顔立ちも体質も、本人どうしがネタにすることはあるけど、それを和人から言われると角が立つことがあるよね。

【後段略】

⑩リスクの軽視

さ：ここの「糾弾対象を可視化するために差別を誘発」というのは。

モ：それは前に聞いた講演の話。もう一度お願いします。

さ：ああ。あれは、私たちが企画した講演会に、あるアイヌの方を講演者としてお呼びしたことがあったんです。そういう講演会って、差別体験やマジョリティの問題を指摘する話題が出るんだけど、会場にはそういう意見に反論しようと思って参加

する人もいる可能性がある。差別体験を否定して見せながら、そこで新たに差別的な発言をするとか。

モ：超ありますね。

さ：だから、事前の打ち合わせをしているときに、講演者として呼び出す人や参加者のための対策をしようと提案したんだよね。質問はその場でぶつけるんじゃないくて、質問紙を回収する形にして、悪意のあるものを除いて回答できるようにしようとか、写真が悪用されることも多いので撮影はお断りにしようという意見も出ていた。

モ：なるほど。

さ：企画側には、私の他にも数人アイヌとその家族の人がいて、必要性を理解してくれて対策にも同意してくれるんだけど「そこまでする必要はないべ」とか「大丈夫だ

ろう」という意見も出て。最終的には質問紙を配るという提案は通ったけど、思い返すと、反論する人は和人側で、対策しようと考える人はやっぱりアイヌやその家族なんだね。リスクを想像できる人は。

質問紙についても和人の人からは「自由な議論を制限することになる」という反発も出て。

他の人は「このゲストの人は、仮に暴言を浴びても自分で反論できる」と言ったり。そういうことじゃない。

モ：うん軽視というのはまさにそれです。言い返せば済むと思っている。その辺が、やっぱりリアルに想像できないんですね。実際に、面と向かって自分を特定して悪意をぶつけられることは誰にとっても嫌な思いをすることです。とっさに反論できない人も多いし、仮に反論したとしたって、そこでの嫌な思いはずっと残る。言い返せ

ばチャラではないのに。そういう経験が無いんでしょう。

さ：そう。質問を受ける人だけじゃなく、その場で聞かされる人も全員が嫌な思いをする。アイヌと名乗ってる人だけじゃなくて、名乗ってなくても関心があって来る人にも悪意のある発言を聞かせることになる。

「差別的な発言が出れば、それで差別があることが参加者にわかるから良いんだ」と言ったり。可視化してない差別といっても、見えていないのは和人だけで、アイヌはいつも感じていることだし、その場で聞かされて嫌な思いをして席を立ちたくなくても、立てば目立ってしまうということを気にする人もいるのでは。

モ：それじゃアイヌが生贄ですね。

さ：何故この場で和人に理解してもらうためにアイヌが生贄にならなければいけないのかという話。

モ：その場で差別を引き起こさなくても問題を伝えられるように、自分たちの主張や言葉を洗練させなければ。

サ：そうですね。

モ：その次の「プレッシャーを利用して沈黙させる」というのは、例えば匿名でアイコンデザインの発表している人が被害を受けるケースのことを想定しています。オンラインでは、アイコンだと明かさずにアイコンが作品を発表することがたまにあるのだけど、それが非アイコンによる盗用だと見なされてバッシングを受ける。

サ：はい。

モ：そういう作り手のアイコン性を否定する為にまことしやかな説が語られる。アイコン様には「ルール」があつて、そこから外れているから作り手はアイコンではない云々とか。その説は学問的には論証がないものだったりするんだけど。でもこうい

う時って叩かれた人は、いくら不当だと感じてても反論できない場合があるんでないかと思うんです。例えば、ネット上では匿名だけど、近しい人にはそういう作品作りをしていると、アイヌであることは伏せて話しているかも知れないでしょう。その人に対して、お前はアイヌではない、アイヌであるなら名乗れとかなんだとかって迫る。これはその人が望まないのに民族性の暴露を迫るといふ点でアウトイングに当たると思うんですよ。アイヌなのに「お前はアイヌではない。アイヌとして発言する権利もない」と、ネット上で宣言される。それに反論しようと思えば、知人が見ているかもしれない場所で自分はアイヌだと宣言しなければならなくなる。こういうことのリスクや、当人が感じるプレッシャーは、非アイヌには実感しにくいことだと思うし、すでにカミングアウトをしていたり、労せずとも周囲が認められるたアイヌにも、想像ができていないように見える。

さ：実際にそういうやり取りを見たことがあって、アイヌ性を否定した方は投稿を削除してるんだよね。それで無かったことにできるだろうけど、言われた方の思いはずっと残るし、やり取りを見ていた人も「あの人はアイヌじゃなかったんだ」とか「アイヌかどうかはデザインを見ればわかるんだ」という誤解はそのまま温存されるかもしれない。

モ：言われた方の人は、自分が反論したりアイヌと名乗るときに、自分の身内全体に影響が及ぶってことを考えなきゃいけないじゃないですか。そう言うことまでは想像が及ばないんだろうね。

さ：こういうのって「自分は女性だ」という人に対して「じゃあ裸になって体を見せて見ろ」と迫るようなものだと思う。たとえ同性でも簡単に見せることはできないし、体を見たって、その人の内面まで確かめられるわけではない。体の性は完全に二

分できるわけじゃないし、仮に男性の体に生まれても内面は女性だという人だっているわけです。だから、他人が判定できることじゃないのに、ネットのような誰でも見ることが出来る場所で、相手に一方的にリスクを負わせるようなことがなぜできるのか。

モ：それは、性自認と体の性が一致している人の傲慢さと同じようなところがあるよね。自他ともに認めるアイヌである人が、人からはなかなかアイヌだと承認されない人に向かって「証拠を出して見ろ、判定してやる」という。だから、この文で言いたかったことは自分で自分をどう思うかってことは、他から口出しできないということ。だから自分で自分をアイヌだと思うことは個人の自由で、ただ、誰かを相手に「私はあなたと同じ経験をしています」とか「私とあなたは同じです」と言うときは、主観的に思うだけではなくて相手の同意が必要だし、相手には反論の余地があ

るけど。

⑪ ネット空間での特定

モ：最近だと、ネットニュースのコメント欄とかに「俺はアイヌだけと差別なんて見たことないけど」とか「アイヌだけど文化振興政策には反対です。必要ありません」というコメントが時々あるけど。

さ：そうだね。SNS等でも、アイヌだと名乗って発言してる人もいて。そういう意見が、いわゆるアイヌの多数派と違ったり保守的な内容だったりすると、ほんとにアイヌなのかという話になったりするけど。でも、その人がアイヌかどうかというのはネット上では判断しようがないから、そこで他人が「絶対にアイヌじゃない」と言いきってしまうのはどうかと思う。言ってる内容ではなく、その人がアイヌかと

うかで「発言権がある」とか「無い」とか言う人いるじゃない。

モ：それは「アイヌなら必ずこう考えるはず！」みたいな決めつけでもあって怖いよね。それに私らみたいに、自分の家族以外で地縁や血縁のあるアイヌがいない立場からすると「コミュニティが認めなければアイヌじゃない」なんていわれたら、事実上排除されちゃうじゃない。

さ：そう。私も父親から聞いてるだけで、それ以外の父方の親戚でアイヌの団体に入ってる人もいないし団体自体が地元じゃないし。名乗ってる人もいないから、直接聞けないし。だから承認どころじゃないけど、それで「発言権がない」とか言われる筋合いはない。保守的な人に反論したいという動機からそういう発言が出るのはわかるんだけど、よかれと思ってそういう意見を広めることで、それを見てるアイヌが、自分がアイヌかどうか悩んでいる人だったら「自分はアイヌとは認められないんだ」

と思ってしまうたらどうするんだろう。

モ：ほんとにそうだね。自分でアイヌだと思ってる人でも、それを見たら自分の立場を攻撃されてるようにも感じるよね。

さ：そう。どこかで文化を学ぶために人を訪ねて、そこで「私の先祖はこうです」と話して、相手も「ああ、そうなんだ」って言うことはあるけど、それは「承認」という、何か手続きめいた物ではないよね。「アイヌどうしであれば、互いを知らなくてもどこかで知人につながる。だから誰ともつながらないお前は偽物だ」っていう人がいるけど、極端でしょ。仮に相手が自分が知らない家系の人だったからって、世の中に知らない人がいるのは当然で「知らない者は認めない」とかふつうは言わないじゃない。実際、隣の家に住んでたって行き来が無い人はいるわけで、ではその人たちは同じコミュニティに属していないなんてことは言えないわけで。

モ：そう。承認という言葉はそこがおかしい。知らないから認めないという人はいるけど、ちよつと特殊だよ。アイヌとしての立場を確立した人が、自分は安全な立場から人を批評して大雑把な話をしているように感じる。

さ：まして自分がアイヌか自信がない人だったら、アイヌのルーツを探ってみるきっかけを奪うことになる。学校で教えられる「アイヌはこういう人たちでした、こういう文化を持ってました」という話でさえ、自分とつながらないという感覚があるから。それを、ネットで「アイヌはコミュニティに属しています」みたいなことを断言されたら、そこから離れた自分はアイヌじゃないんだと受け取ってしまう人もいるよね。私の場合は親から曾祖母がアイヌとしか聞いてないから。

【中略】

さ：アイヌの方でも「アイヌだったら自分の家族や知り合いとの繋がりがわかる」

とか言ってる人は、「自分の家族や知り合いにツテのある人しか認めない」と言っているに過ぎない。つながりのない人なんて普通にいる。向こうはこっちを知らないだろうけど、こっちだって向こうの事は別に知らない。そういうのはやめて欲しい。

モ：何か、変な万能感というか、自分が代表しているみたいな錯覚も感じる。

さ：別な場面だけど、「アイヌなら伝統文化を学ぶ場に必ず接触できるはず。それができないアイヌなんていない」と言い切ってたアイヌ文化好きの和人もいて、すごく腹が立った。それは、自分で「本物のアイヌ」を定義して、それしか認めないとやっているのと変わらないと思う。単にツテがない人だけじゃなくて、葛藤があって関われない人だっているのに、そういう人のことが頭から抜け落ちてるんだらうね。そういうアイヌの存在はどうしてもよくて、自分が和人としてアイヌ文化に関わる欲望を優先していることに気づいていない。自分たちの主張が、全く関係のないこと

ろで、誰かを巻き込むことを慎重になってほしい。

モ：うん、その人自身がアイヌかどうかはネットで判定することじゃないよね。ただし、アイヌとっている方の主語が、「アイヌから」「我々アイヌ」みたいに大きくなっていくとすれば、その時には他のアイヌの承認がいる。その認識を徹底するしかないんじゃないか。

大きい主語の問題は、アイヌに対して否定的な論調にも肯定的な論調にもあるけど、例えば仮に「自分はアイヌだけどアイヌ語なんて必要ないもーん」という人がいたとしても、その声を以てアイヌ語を必要とするアイヌの意見が消されるわけじゃない、と誰もが理解すること。

⑫ 和人の貢献・逆差別

さ：「和人の関係者の貢献を不当に低く評価すべきではない」というのは具体的にどういうこと。不当かどうかの解釈も人によって割れそうだけど。

モ：私が直接見聞きしたことでは、例えば、和人で工芸やアイヌ語がんばっている人がいるとする。それに対して「和人がやってもなんか薄っぺらいんだよな」と言ってみせるとか。頑張ってアイヌ語の長い物語暗記する努力をしている人に向かって「なんか、アイヌ語に聞こえないんだよな」と言ってみせるといことです。あとは意見が割れたときに「シャモ」の一言で片づけたり「アイヌの心」を持ち出してきたり。

「お前にアイヌの心はわからない」とか。

さ：そういうことがあるんだ。

モ：アイヌが作って来たデザインや彫り付けの技術を体現することは技術の問題だから、血筋とは話が別でしょう。□承文芸って「文字が無いから」とか「幼稚な内容

なんだろう」という見られ方をする。それは「長くて複雑なものを書かずに覚えられないはずがない」という先入観から来ているところもある。だから実際に長大な物語を何も見ずに語ることで、口承文化を実感して正当に評価することにつながると思う。

説明するだけじゃなくて、確かな技術を身に付けて実演できると説得力があるし、人の層が厚くなるとお互い刺激になって力が付くでしょう。後は、某研究機関の職員がオンラインで使えるアイヌ語の資料とか、ものすごく便利なものを作って利用者もいるのに、関係者はぜんぜん評価しないとか。

そうやって実践や研究に興味を持って打込むこと自体は否定してはいけないよね。

【後段略】

ブックガイド

本書での説明に参照した書籍です。本文中の関連する場所に、書籍の番号を表示しています。そのテーマについて深く学んでみたい方には一読をお勧めします。

- ① 植田晃次 山下仁(編著) 二〇一一年 『共生』の内面―批判的社會言語学からの問いかけ』三三三社。
- ② 太田博樹 二〇一七年 『遺伝子が映し出す進化の地形図 進化医学から捉えるルーツ探し』『現代思想』二〇一七年六月号、青土社。
- ③ 上水流久彦ほか 二〇一七年 『東アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂。
- ④ 北原モコットウナシ 二〇一二年 『アイヌ・和人への手紙2』『アイヌ・先住民研究』第2号、北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
- ⑤ キム・ジハ著 尹怡景訳 二〇一二年 『差別はたいてい悪意のない人がする―見えない排除に気づくための10章』大月書店。
- ⑥ 小坂井敏晶 二〇一六年 『増補 民族という虚構』筑摩書房。
- ⑦ 佐藤裕 二〇一八年 『新版 差別論―偏見理論批判』明石書店。
- ⑧ 清水晶子 二〇一二年 『第6章 「同じ女性」ではないことへの希望―フェミニズムとインターセクシヨナリ

ティ』『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』言言社。

⑨ ジャミール・ザキ著 上原裕美子訳二〇二二 『スタンフォード大学の共感の授業 人生を変える「思いやる力」の研究』ダイヤモンド社。

⑩ スチュアート・ヘンリー一九九三『民族意識』も「伝統」もすべてがフィクションである―』別冊宝島
又『アイヌの本』宝島社。

⑪ スチュアート・ヘンリー二〇〇二『民族幻想論 あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社。

⑫ 中山京子二〇二〇『人種と民族をどう教えるかー創られた概念の解体をめざして』明石書店。

⑬ 西原和久・杉本学(編)二〇二二『マイノリティ問題から考える社会学・入門』有斐閣。

⑭ 水野直樹二〇〇八『創氏改名ー日本の朝鮮支配の中で 岩波新書(新赤版)二二八』岩波書店。

⑮ 山田康弘二〇一五『つくられた縄文時代 日本文化の原像を探る』新潮社。

⑯ ロビン・ディアンジェロ二〇二二『ホワイト・フラジリティ』明石書店。

おわりに ― つないでほぐく アイヌ／和人

本書ではまず、アイヌと和人が民族として語られるようになった成り立ちを見てきました。そのときに、民族の境目の目安にされたのが文化や体質や血統でした。私たちの時代にもこの感覚は受けつがれていますが、改めて考えるときれも絶対的なものではありません。

このあいまいで感覚的な線引きが、大きな影響力を持っています。「自分は文化・体質・血統が薄いから、アイヌとはいえないのか」と悩む人が多くいます。もとがあいまいなものですから、あまり固く考えすぎず、他の人との接点・共通性を見つけ、すつきりしたり、力づけられるのであれば、それで良いのではないのでしょうか。

とはいえ「私はアイヌだ」と思っても「他のアイヌも私と同じだ」とは限りません。そのように言うことが、場合によっては人を傷つけることもあります。アイヌの体験には幅があり、それを尊重することは、自分の自由を守ることになりません。くだけた言い方をすれば「あなたはアイヌではない」と突き放されるのは嫌ですが「アイヌならみんな同じ」と雑にくくられたり「アイヌならこつしろ・こつろ考えろ」と迫られたりするのも困ります。代表せず代表されず、ほどよい距離と共感がポイントです。

個人が思いのままにくらすためには、世の中の価値観や制度を動かさなければならぬ場合もあります。例えばアイヌ語を使い、維持したいという個人的な思いも、つきつめていくと学校や会社や役所、つまり社会がそれを許すかという問題につながります。このとき「アイヌ語を使いたい」

という気持ちと同じくする人どつしは(他の点で違っても)協力しあえます。多様だから、みんなちがうから、というところだけに注目すると、どこまでもバラバラになってしまいます。違いがありながらも、自分の取り組みが誰かの助けになり、協力し合う可能性があることをいつも考えていたいものです。

和人にも、普段は意識しない共通の立場、共通したふるまいがあります。ときに自分が望まなくても誰かを抑圧することに関わったり、労せずして優位な立場に立ったりと、和人としての立場にしばられることもあり、必ずしも居心地の良いものではありませんでした。そのことを望まないのであれば、目をつぶったり耳をふさいだりするのではなく、和人という枠をほぐし、そこから距離をとるのが良いでしょう。そのためには、まず対象(自分の集団)をはつきりととらえることが必要です。

そついつながらは、民族的な立場だけでなく、年齢や性別、性的指向、障がい、ルッキズムなどいろいろな場にも見つけられます。自分達をしばっているものの共通性に気付くことで協力ができ、それが共感や共生につながっていくのではないのでしょうか。

本書をまとめるにあたり、原稿をチェックしてコメントを下された方々、対談に協力してくださいました方々、助言および関連する研究・文献について教示くださった落合研一氏、加藤博文氏、北嶋イサイカ氏、堺田香氏、城石チャッスマ氏、瀬口典子氏、谷本晃久氏、中村冬白氏、葦島栄紀氏、山崎幸治氏に感謝します。特にコラム⑥は、落合氏からの助言に全面的に依ったものです。記して感謝を申し上げます。

奥付

著者 北原モコットウナシ

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

つないでほごく アイヌ／和人

二〇二二年三月十九日

発行者 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

札幌市北区北8条西6丁目 電話〇一―七〇六―二八五九

印刷 柏楊印刷株式会社

aynu
teetawanoankur
kanpinuye cise
kapar kanpisos
12

つないでほどく
アイヌ／和人